

駒は乙女に
頬染めさせてⅢ

主な登場人物

鈴城璃音―モデル、女優 高校生

木崎麻央―高校生

麻生泉美―上同

名村耀一郎―高校生

二藤晶輔―高校生

鈴城遙平―璃音の父

渚本幸仁―俳優

鹿野基之―稲島町職員

牧村吟子―芸能事務所社長

衣川栄枝―稲島分校用務員

村田忍―ストア―の店主

麻生義文―泉美の父

涼子―泉美の母

千堂駿太―装蹄師

猿渡広道―JRA騎手

海野颯希―JRA騎手

朝倉美途―右同

千堂寿々芽―右同

早坂姫香―右同

○稲島の権美方浜（夜）

凧の海に向かってしている朝倉美途、海野颯希、千堂寿々芽、早坂姫香の四人。

美途「颯希に勝つ！」

叫ぶ美途。一瞬驚く颯希。

颯希「美途に勝つ！」

二人、顔を見合わせ笑う。

いきなり手にしていたビールのロング缶を振り始める寿々芽。プルを開け、美都と颯希にビールをかけ始める。

寿々芽「そりゃあ！」

美都「きゃあつ！」

颯希「ちよつとつ！ 何やっとなの、寿々芽さんっ！」

姫香も同じようにしてビールを二人にかけ始める。

姫香「ほりゃ、ほりゃあ！」

美都「ちよつ、姫香さんまで！」

颯希「なんなんですかあつ！」

寿々芽「祝勝会だよ！ あんたらの同着G I優勝祝勝会！ ビール

かけつきもんでしようが！」

逃げる美都と颯希。追いかける寿々芽と姫香。

颯希「あー、もうマジで信じられない！」

美都「ムチャクチャやないですかっ！」

姫香「よかったねえ、仲直りできて。感謝してほしいわよ」

颯希「あーもうびしょびしょ！ てか目が痛い！」

寿々芽「風呂入って洗濯したらいいだけのことじゃない。一生忘れない祝勝会になったねえ」

美都「なにが祝勝会ですかっ！ このマイルカップ、大差ドベプー

ビーコンビー！」

寿々芽「あ、それ言う……」

颯希「ほんま『恥ずかしいレースはできない』なんてよう言えたもんですよねっ！」

姫香「傷ついちゃってるのに……」

「うなだれる寿々芽と姫香を見て、笑う美都と颯希。見つめあつて。」

美都「今度はわたしたちが二人にビールかけてあげないとダメだね」

颯希「そやね。テレビ中継してるインタビューの最中にやったる」

寿々芽「放送事故だよ、それ」

美都「だからGI勝ってくださいよ」

姫香「ははは、ほんとだ。勝たないとビールかけもなにもないもんだ」

颯希「しばらくは追いかけさせ続けてください。そのうち抜きます

から」

寿々芽「言ってくれるねえ」

向かいあう二人と二人。

ズボンのポケットからもう一本缶ビールを取り出し激しく振り、また二人にかけ始める寿々芽。

寿々芽「そおりやあ！」

美都「きゃっああっ！」

颯希「なんなんやこの人は！ てか、何本持つてるねん！」

寿々芽「こちとら人に酒ぶっかけるのはお手の物なの！ ねえ、姫

香！」

姫香「ちがいないわ。お酒持ったこの人にロックオンされたのが運の尽きよ二人とも」

逃げる美都と颯希。それを追いかける寿々芽。

○路上（夜）

権美方浜ではしゃぐ四人を、少し離れた路上から見ている泉

美と真央。

泉美「楽しそう」

真央「うん」

泉美「でもよかった。二人仲直りできたみたいで」

真央「泉美ががんばったからや」

泉美「ううん、わたしは何もしてへんよ」

真央「年明けたんやね——あと一年とちよつとや」

泉美「え？」

真央「泉美といっしょに居てられるの。受けるんやろ、おばちゃん
の出た大阪の高校」

泉美「島出るのがやったら、本校受けるよりそこ受けろってお母さん
がずつと、な。」

真央「うん。泉美は、島出なあかんよ」

泉美「真央」

真央「泉美にはこの島は小さすぎるわ」

泉美「真央はどうするん？」

真央「わたしは分校行くよ」

泉美「本校受けへんの？」

真央「サクラコの面倒ちゃんとみられへんようになるやん」

泉美「うん。サクラコも真央にずつとそばにいてほしいと思う。」

真央「頷き」そやからわたしはこの島に残る——うわあ、だるま
んが転んだ始めたであの人ら。ええ大人が」

泉美「朝まで遊んでるつもりやろか——帰ろうか」

真央「うん」

並んで歩き出す二人。

泉美「似合ってるで。真央の巫女装束とお化粧」

真央「そうかなあ。去年お父さんにすごい笑われた」

泉美「帰ったらちよつと寝る？」

真央「ううん、朝まで起きてようよ」

泉美「そやね」

真央「やっぱりわたしも水シャワー？」

泉美「うん」

真央「ううう……」

泉美「あははっ。三が日だけやけど真央も巫女やもん」

真央「御神籤渡すだけやのに……」

二人、どちらからともなく手を繋ぎ歩いていく。

砂浜から女騎手四人のはしゃぐ声が響き続けて。

(F・O)

○メインタイトル

〈駒は乙女に頬染めさせてⅢ〉

○ファッションショー会場

十代の女の子たちで立錐の余地もない会場。ランウェイをモデルたちが歩いてくる。そのたび嬌声があがる。

登場する鈴城璃音。(15)ひときわ大きな歓声が上がる。

ランウェイを颯爽と歩いてくる璃音。「璃音ちゃん!」「かわいーっ!」同世代女子の嬌声。笑顔で手を振る璃音。立ち止まりポーズを決める。

笑顔を振りまきながら帰っていく璃音。振り返り、両手を大きく振る。歓声が最高潮になる。

○テレビ局・スタジオ

ドラマ撮影中。法廷のセットが生まれ、裁判の場面が撮影されている。証言台に立っている璃音。検事役の俳優、渚本幸

仁(46)が璃音を問い詰めている。

幸仁「『では、誰が、あなたのお母さんを殺したのですか』」

璃音「『……わたしです! お父さんじゃありません! わたしが母を、あの女を殺したんです!』」

璃音、熱演。

○前同・廊下

撮影は終了。スタッフに「お疲れさまでした」と頭を下げ廊下を歩いていく璃音。

幸仁「鈴城さん」

璃音「(ふりかえり) はい」

幸仁、璃音の前まで来て。

幸仁「よかったよ。ドラマ出るの初めてだよね」

璃音「はい」

幸仁「いいセンスしてるよ」

璃音「ありがとうございます」

幸仁「本名だよね、きみ」

璃音「はい。そうです」

幸仁「うん。鈴城璃音、インパクトのあるいい名前だ。その名前で

勝負していけばいいと思うよ」

璃音「はい。ありがとうございます」

幸仁「お父さん、元騎手だったよね」

璃音「え、あ、はい」

幸仁「十年くらい前だったかな、万馬券取らせてもらったことがあるんだ」

璃音「馬券、買われるんですか」

幸仁「たまーにね。マイルチャンピオンシップ、十五番人気ユニオ
ンサンデー。単勝五千円勝ってたんだよ。見事な逃げ切り。なん

ていうかさ、血が逆流する感じだった」

璃音「そうなんですか」

幸仁「うん。あのときはありがとうございますってお父さんに伝えておいてよ、
はは」

璃音の肩をポンと叩き、去っていく幸仁。その後ろ姿を見送
る璃音。歩き出す。

○鈴城家(マンション)(夜)

帰宅する璃音。キッチンで料理していた父の遥平(47)が
振り返る。

遥平「おかえり」

答えない璃音。自分の部屋へ向かう。

× × ×

テーブルを前に差し向いで夕食を摂っている父娘。

遥平「お父さんな、就職決まった」

璃音「え？——それって」

遥平「うん。やっぱり予想士の修行することになったんだ、大井で」

璃音「やめてって言ったよね、それ」

遥平「璃音。元騎手だったってな、だれもが厩世界に残れるわけじゃない。俺みたいな元三流じゃなおさらだ。泥水すすってでも生きていかなきゃならないんだ」

璃音「ギャンブルばっかやって調教師の勉強しなかったからじゃない。二日酔いで調教したりするから、どこからも調教助手の声がかからなかったんじゃない」

遥平「璃音——」

璃音「工場勤めとか、スーパーマーケットのパートタイマーの求人とか調べた？」

遥平「璃音、おまえそれは」

璃音「調べてないよね。かっこいいこと言ってるけどさ、泥水すすって生きるってそういうことだと思っよわたし」

遥平「——」

璃音「ほんと、元GIジョッキーのプライドだけは一人前。なにが予想士よ。当たらない予想、馬券親父に売りつけて小金稼ぐんだ。

詐欺師といっしょじゃん」

遥平「璃音っ！」

手を振り上げる遥平。

璃音「なによ！ 叩きなさいよ！」

動きが止まる遥平。父娘、にらみ合って。

立ち上がる璃音。

璃音「モデルにさせてくれてありがとう、お父さん。おかげで一人で生きていく自信ができました」

部屋を出て行こうとするが、振り向いて遙平を見て。

璃音「通信制の高校、入学決まった。事務所の寮に入るから。これからはギャラは全額事務所に管理してもらうことになります。予想士でもなんでもやって生きてください。でも、娘の収入でご飯食べられなくなるってことだけは覚えておいてよね——ドラマの台詞で知っただけだし、ヒモって言うんだよね、あんたみたいな男のこと」

ドアを激しく音立てて閉めてキッチンを出る璃音。ひとり、俯く遙平。

○稲島・稲島神社・ハヤテサクラコの馬房の外（夜）

激しい雨が降っている。

○前同・馬房の中（夜）

寝藁の上に横たわり、苦し気に喘ぐハヤテサクラコ。泣きながらその腹をさすっている真央。

真央「サクラコ、サクラコ……」

喘ぎ続けるハヤテサクラコ。

○××乗馬クラブ・調教コース

乗馬用の馬に乗っている璃音。その様子をカメラが追っている。

○前同・厩舎の中

馬にブラッシングをする璃音。その様子をカメラマンが撮影する。

○テレビ局・スタジオ内

若い女性たちが観客として入ったスタジオ。
司会者Xと中堅女優Yが司会席に座っている。ゲスト席に座

っている璃音。

璃音の乗馬風景を撮影した画面が終わって。

X「やりますね、璃音ちゃん。めちゃくちゃ上手じゃないですか」

璃音「ありがとうございます。久々で不安だったんですけど。クラブスタッフの方にも『ブランク感じない』って褒めてもらいました」

X「自慢かよ！」

笑いがおきるスタジオ。

Y「今回馬術広報大使に就任したわけだけどどんな気持ちですか？」

璃音「そうですね。お話をいただいたときは、正直びっくりして。わたしでいいのかなって。でも馬術はやっぱり楽しいし。その楽しさを伝えていくために、わたしで少しでもお役にたてることがあるならと、お受けしました」

Y「馬術は小学校入ってすぐに始められたんですよね」

璃音「はい」

X「それはやっぱり中央競馬の騎手だったお父様の影響から？」

璃音「はい。父に頼んで、『璃音もパパみたいにお馬さん乗る！』な、なんて言って」

Y「なんで馬術クラブやめたの？」

璃音「小三から始めたモデルの仕事がだんだん忙しくなってきたので。本当はずっと通いたかったんですけど。でもこんな形で馬術とまた出会えたのは本当に嬉しいです」

X「今回の広報大使就任はお父さんには？」

璃音「はい。事務所の寮に入ってから決まったので、電話で報告しました。すごく喜んでくれました」

Y「お父さんのこと、大好きなんだね」

璃音「はい。母とはわたしが幼稚園のとき死別しました。以来父が男手一つでわたしを育ててくれたんです。モデルの仕事をすることも許してくれたし。父には本当に感謝しています。パパのことが大好きです」

涙ぐむX。

Y「ちよつとやだあ、泣いてんのー?」

X「うるさいよ! 四十過ぎたら涙もろくなるの! うちの娘もこんなふうに俺のこと思ってくれてっかなあ」

璃音「泣かせちゃった」

笑いにつつまれるスタジオ。

Y「じゃあ最後にファンの方にメッセージをお願いします」

璃音「はい。いろんなご縁に恵まれて、今のわたしがあると思います。今後も一つ一つの出会いを大切に、モデルとして、女優として、成長を続けていきたいと思えます。まだまだ未熟なわたしですが、応援よろしくお願いします——こんな感じでどうですか」

X「ちよつとなにく、完璧じゃーん」
につこり微笑む璃音。

○東京の街角・交番の前

掲示板に特殊詐欺撲滅のポスター。モデルになっているのは婦人警官の制服を着た璃音。その前を歩いていくアタッシュケースを持った背広姿の遥平。

○前同・ビル街

歩いていく遥平。

○前同・駅前の広場

噴水の前に立っている遥平。そこにやってくる八十歳ほどの老婆。近づいていく遥平。老婆と遥平、向かい合う。

遥平「佐山さんですね」

老婆「はい」

遥平「指定させていただいたお金は、持ってきていただけましたか」
老婆「はい」

老婆、手にしたバッグの中から、分厚い封筒を取り出す。

老婆「これで、孫は会社をやめなくてすむんですね」

遥平「はい、そうですよ」

封筒を受け取る遥平。背広の内ポケットに入れようとしたその時。

歩み寄ってきていた男たち三人に取り囲まれる。

遥平「え？ え？」

男たち、刑事である。

刑事「ちよつと話をきかせてもらおうかな」

遥平、呆然。老婆、遥平を睨みつけて。

老婆「年寄り嘗めてんじやないよ！ うちの孫はアメリカの牧場で働いてるんだ！」

その場にへたりこむ遥平。

○☆☆寮・ダイニングキッチン（夜）

璃音が住む寮のダイニングキッチン。夕食の時間になり、未成年のモデルや女優の卵たちが集まってくる。大きなテーブル前に座り、食事をとり始める彼女たち。（五人）璃音もやってきて座り食事を始める。

映っているテレビから璃音の〈特殊詐欺撲滅キャンペーン〉のCMが流れる。

マナカ「あ、璃音ちゃんだ」

画面を見つめる全員。

【画面の璃音】「へみんなで力を合わせて特殊詐欺をなくそう！」

ミキ「警官の制服、メチャ似合ってるよね」

アリサ「璃音ちゃんはなに着ても似合うよ」

カナ「ねえ、こういう公共のCMのギャラってさ、いいの？」

璃音「よく分かんない。ギャラのことは社長に任せてるから」

チナミ「あゝ、でも璃音ちゃん、マジ憧れる。わたしもいつかCM

とか出たいなあ」

ミキ「映画、決まったんだよね」

璃音「うん。主演じゃないけど、主人公の妹役」

アリサ「いいなあ」

少女たち五人から羨望のまなざしを受け、嬉し気な璃音。

画面切り替わり、ニュース番組に。

キャスター「次のニュースです。今日、都内で特殊詐欺の容疑で男が現行犯逮捕されました。捕まったのは鈴城遙平容疑者、四十九歳。鈴城容疑者は、八十歳の女性から現金八十万円を受け取るうとしていたところ、この女性から通報を受けて張り込んでいた警官三人に取り囲まれ、現行犯逮捕されました。同容疑者は容疑を認める供述をしているとのこと。警察は同容疑者を詐欺のへ受け子」と推定し、その背後に、大きな特殊詐欺グループの存在があるとみて、厳しく追及していく模様です。なお鈴城容疑者は、かつて中央競馬の騎手として活躍。十年前にはマイルチャンピオンシップで優勝したこともあるGIジョッキー。元アスリートが関わった今回の事件は今後波紋を呼びそうです。では、次のニュースです——」

画面をじっと見つめている六人。五人がゆっくりと璃音を見る。画面を見つめたままの璃音。凝ったその顔。じっと五人の少女から見つめられ続ける璃音。

○佐原高校稲島分校・全景

海沿いにある小規模の分校。

○前同・一年A組（始業前）

一クラス二十五名の教室。窓際の席に座り、校庭の桜をボートと見ている真央。クラスメートの名村耀一郎と二藤晶輔がやってきて。

耀一郎「麻生が居てへんようになって、寂しいなあ。二人いつつもいっしょやったもんなあ」

晶輔「なあ、ほんまや」

真央「……」

耀一郎「俺も、なんや、こう、なあ」

真央、耀一郎をじろつと見る。

耀一郎「俺も麻生が居てへんようになって、なんか、なあ」

真央「あんた、なに言うてんのよ」

耀一郎「いやまあ、なあ——なあ木崎、木崎の成績やったら、本校

十分行けたやろ。分校に来んでも」

晶輔「そやそや」

真央「よう動く口やな……」

耀一郎「やっぱり馬の世話があるから？」

晶輔「そやろ？」

真央、鋭い目で二人を睨みつける。

二人、気おされ立ち去る。再び咲き誇る桜に目をやる真央。

○稲島・稲島神社 ハヤテサクラコ馬房の横

ハヤテサクラコの墓標が立っている。その前にたたずむ真央。

そこにやってくる鹿野基之（29）。

基之「こんにちは、木崎麻央さん」

基之をげんそうに見る真央。

基之「役場に勤めてる鹿野基之と言います」

真央「あの」

真央の横に立ち、墓標に手を合わせる基之。

基之「ハヤテサクラコは、残念やったね」

真央「——」

基之「宮司の娘さんの、えっと——」

真央「泉美は、大阪の学校に行きました。寮生活してます」

基之「そやったね。泉美ちゃんにサクラコのこととは？」

首を横に振る真央。

基之「言っていないのん？」

真央「もう少ししたら、言います。あの、なんですか」

基之「うん。真央ちゃん。代々この稲島町の予算には神馬繋養費い
うのが組み込まれてるのは知ってるかな」

真央「はい。それでサクラコの餌とか買ってたんですよ」

基之「うん。実はな、地域振興課のぼくが次の神馬の手配を任せられ
たんや」

真央「次の神馬——」

基之「うん。宮司さんから頼まれてな。急な話でたいへんやったけ
ど、どうやらまとまりそうなんや」

真央「……」

基之「島の伝承でな、稲島神社に神馬が居てへんようになったら、
島に災いが起きるというのがあってな」

真央「……迷信です、そんなの」

基之「うん、迷信やなあ。ほくもそう思う。今の時代にアナクロも
ええところや。けど神社やお寺なんていうものは迷信で成り立つて
るところがあるんやろうなあ。なあ、真央ちゃん、次の馬が来た
ら、また面倒みてやってくれるか」

真央「……」

基之「真央ちゃんしか居てへん。この島で馬の扱いに慣れてるのは。

宮司さんの希望でもあるんや」

真央「サクラコやったからです」

基之「ん？」

真央「サクラコやったから、わたしはずっとそばに居たんです。そ
れだけです」

基之「そうかあ——でも、真央ちゃんしか居てへんのやけどなあ」
墓標を無言でじっと見つめたままの真央。

○東京芸能事務所・自社ビル（外景）

○前同・社長室

大きなデスクを前に座っている社長の森村（57）。対峙して

いる璃音。

森村「困ったことになったね」

璃音「……すみません」

森村「きみが謝ることじゃないよ。ただ、父親が特殊詐欺撲滅グループの一員だったというのは、さすがにちょっとね」

璃音「はい」

森村「さつき警察の上の方から連絡があつたよ。特殊詐欺撲滅キャンペーンのイメージキャラクターからは降りてほしいということだった。了承したよ。CMも打ち切りになる」

璃音「……はい」

森村「映画やドラマの話もおそらく流れるだろうし、今後は入りにくくなる」

璃音「——」

森村「きみはこれからへ老人を騙してお金を取っていた男の娘」というふうに見られる。それが大衆であり世間だ。そんなきみを起用することにスポンサーは二の足を踏むだろう。はっきり言うよ。きみのこれからの芸能活動は、厳しい茨の道になる。もちろんフオーロはする。けれど歩けないほどの逆風が吹きつけることだけは覚悟していたほうがいい。それでも続けるかい」

俯く璃音。

璃音「少し、考えさせてください」

森村「うん。ゆっくり考えて返事をください。——きみ、お母さんとは死別じゃないそうだね」

璃音「え」

森村「家出る時レポーターに取材受けてさ。そのときに彼が教えてくれたんだよ。きみが四つのときに家を出ていったんだってね」

璃音「……」

森村「そういうことを調べるのが彼らの仕事だからね。母親と幼いころに死に別れ、頑張って健気に生きてきたってイメージで売り出してきたのが台無しだ」

璃音「すみません……」

森村「もうそのこともネットに出回っているはずだよ。ますますこの世界で生きにくくなったと思うといい。その点についてはきみ自身がこの会社に迷惑をかけたんだ。それはちゃんと自覚しておいてほしよ」

璃音「……はい、申し訳ありませんでした。失礼します」

部屋を出ていこうとする璃音。

森村「ああ、鈴城さん」

璃音「(ふりむき)はよ」

森村「芸能活動やモデルの活動だけが人生じゃないんだよ、いいね」

璃音「はい、ありがとうございます」

部屋をでていく璃音。

ひとりになる森村。スマホが鳴る。出る森村。相手は旧知の

芸能事務所幹部。

森村「もしもし……おお、久しぶり。なに、心配して電話くれたの？
優しいねえ。いつからそんなに思いやりのある人間になったの。
わははは。そうだよ、えらいの抱えちゃったよ。これからちよ
つと大変だけどさ。まあまだまだ駆け出しのヒヨッコだったし、
本人がクスリやってたなんてわけじゃないし、さほどの傷でもな
いよ。うん。今本人呼び出して遠回しにやめるよう言ったとこ…
…」

陽気な調子で森村の電話が続く。

○街路

力なく歩いていくマスク姿の璃音。

交番の前、若い警察官が掲示板に貼られた璃音のポスターを剥がしている。警察官、剥がしたポスターをしばらく見つめているが。蔑むような笑みを浮かべる。ポスターをくるくる巻いて交番の中に戻る警察官。

立ち止まり、その様を見ていた璃音。また力なく歩き出す。

○芸能事務所・リビング(夜)

ダイニングキッチン隣のリビング。戻ってくる璃音。寮生たち四人が璃音に詰め寄る。ソファでマナカが泣いている。

ミキ「よく戻ってこれるよね、マジで」

璃音「え」

アリサ「マナカちゃん、決まりかけてたショーの出演取りやめになった——あんたのせいよ」

璃音「——」

カナ「さっき常務から電話があつてき、しばらくうちの事務所のモデルは使わないって、運営者から連絡きたって。理由訊いても言わなかったけど、そんなの答えはひとつじゃん」

チナミ「マナカちゃん、ショー出るの初めてで、すごい楽しみにしてたのに。こんなのひどいよ」

顔を上げるマナカ。泣き腫らした目で璃音を睨む。

マナカ「しばらくっていつまでか分かってんの！ あんたが事務所にいる間ずっとよ！ あんたがいるうちはここにいる誰もモデルの活動できない！ 売れてる人たちはそうじゃなくてもわたしたちは違う！ わたしが証拠よ！」

答えられない璃音。

ミキ「ネット見たらさ、うちの親の仕事まで書かれ始めてる」

アリサ「今みんな確認した。あんた以外五人の親はいたって普通。」

特殊詐欺やるような腐った親はあんたのところだけ」

カナ「それにお母さんと死に別れたなんて嘘ばっか。男作って逃げたんじゃん。そうまでして売れたかったわけだ。マジ最低」

璃音「……ごめんなさい」

チナミ「謝るのとかいいからさ、一日でも早くやめてほしいんだけど」

五人の射るような目線に晒され、俯く璃音。

○稲島・稲島神社・境内

待っている基之と真央。馬運車がやってきて境内中央で止まる。

運転手と厩務員の男二人が車から降り、

車に架け橋が渡される。厩務員に曳かれ架け橋を降りてくる

青鹿毛の馬。地に降り立つ。

基之「ヤマトガワヒョウガ。中央で走ってたサラブレッド。これが

僕が選んだ新しい神馬や。知らんか真央ちゃん」

首を横に振る真央。

厩務員「お嬢ちゃん、この馬はな、G IIの日経新春杯勝ってるくら

いの馬だ。菊花賞や春の天皇賞にも出たこともある」

真央「あの、なんでそんな馬がここに？」

基之「疑惑の馬なんや、この馬は」

真央「疑惑の馬？」

基之「四着になった札幌記念の後で禁止薬物のカフェインが尿から

検出されてな。失格で賞金は没収や。次のレースも予定されてた

んやけど、ドーピング違反の疑いがある馬を走らせることに批判

の声があがってなあ。そのまま引退や」

真央「誰が、なんのためにその薬を飲ませたんですか」

基之「分からん。警察の捜査も入ったんやけど真相はやぶの中や。

調教師は資格停止一年でそのまま廃業。厩務員は自殺した」

真央「自殺——」

基之「ああ。『わたしは潔白です』いう遺書遺してな。引退してから

この馬は乗馬クラブに引き取られた。けどなあ」

真央「どうしたんですか？」

基之「三回続けて練習生が落馬して骨折する事故があつてな。以降

ゲンが悪い言うて誰にも乗ってもらえんようになった。呪われた

馬って言われてたそうや。ねえ」

厩務員を見る基之。頷く厩務員。

厩務員「下手くそが三人続けて乗っただけだよ」

真央「鹿野さん」

基之「ん？」

真央「なんでこの馬を？」

基之「真央ちゃんは今の話聞いてどう思った？」

真央「疑惑の馬とか、呪われた馬とか、なにそれ。この馬はなにもしないのに」

基之「うん。それも迷信やんなあ」

真央「迷信ですよ」

基之「迷信を打ち壊すには迷信がええかと思ってるなあ」

真央「迷信を打ち壊す」

基之「うん。呪われた馬が神馬になるのも面白いやろ」

厩務員「廃用寸前だったんだ。幸運なやつだこいつは」

基之「それにこの馬には日経新春杯の馬券取らせてもらった恩もあるしなあ」

厩務員「お、取ったの？ あのレース」

基之「ええ。単勝一本かぶり。一万円が五十二万。気持ちよかったなあ」

厩務員、真央を見て。

厩務員「大丈夫そうだな、このお嬢さんなら」

真央「え」

厩務員「馬も人もいっしょ。目を見りゃ芯の強い弱いはだいたい分かる。頼んだよ。ヒョウガのこと」

ヤマトガワヒョウガの目をじっと見る真央。

厩務員「この馬はだいぶと拗ねてる。分かってるんだよ、自分が人間からどう思われてきたか」

ヤマトガワヒョウガ、真央の目を見ているが、やがて首を下げ地を向く。

そのままじっとしている同馬を見つめる真央。

○拘置所・面会室

座っている璃音。後ろで職員が立っている。入ってくる遥平。
アクリル板を境にして向かい合う父と娘。

遥平「璃音——ごめん」

遥平をじっと見つめ続ける璃音。しばらく無言。

璃音「お金、入れてたらよかった」

遥平「え」

璃音「そしたら、あんたは詐欺なんかのグループに入らなかった。

そしたらわたしはモデルも芸能の仕事も続けられた。あんたにお

金あげてたらよかった」

遥平「……」

璃音「もうなんもなくなっちゃったよ、わたし。事務所もやめたし、

入ったばかりの通信制の高校も退学した。だから刑務所から出

てきてわたしのところ来ても、あんたにあげるお金なんかないん

だよ——それを言いに来たんだ」

遥平「璃音、ごめんな」

立ち上がる璃音。面会室を出ていきかける。

遥平「璃音、これからどうするんだ」

璃音、振り返って遥平を見て。

璃音「あんたには、関係ない。永久に関係ない」

面会室を出る璃音。一人取り残される遥平。

○街路

歩いていく璃音。

○イベントホール前

立ち止まる璃音。入っていく。

○前同・受付

受付嬢と話しをする璃音。

○前同・廊下

ホール職員の後について歩いていく璃音。

○前同・イベントフロア

だだっ広いイベントフロアに入り、そこを見渡す璃音。目を閉じる。

●璃音のイメージ

【ファッションショーが行われている。ランウェイを歩いてくる璃音。歓声が起こる。笑顔でポーズを決める璃音】
目を開ける璃音。

璃音「ありがとうございます」

職員に頭を下げる璃音。イベントフロアを出ていく。

○テレビ局前

歩いてくる璃音。局へと向かう。

○前同・入口

警備員に止められる璃音。二人の会話（音声OFF）。何度か頷く璃音。少し頭を下げてその場を立ち去る。

○街路

歩いていく璃音。後ろからスポーツタイプの自転車が追い抜いていく。そのまま少し走って止まる自転車。男が振り返る。
俳優の幸仁である。

幸仁「鈴城さん？」

璃音「渚本さん」

自転車を押して璃音に近づく幸仁。
向き合う二人。

幸仁「久しぶりだね——だいぶ痩せたね。ごはんちゃんと食べてる？」

璃音の目から涙が溢れる。うずくまり嗚咽する璃音。

○居酒屋・外景（夜）

下町、雑多な飲み屋街にある居酒屋。

○同・店内（夜）

賑わっている店内。座敷に座っている璃音。向かいに座っている幸仁。その隣に幸仁の事務所の社長、牧村吟子（52）。

吟子「ほんまに、こんな若い子ほっぽりだして。なに考えてんのかあそこの社長は」

璃音「ほっぽり出されたわけじゃないです。三か月は寮にいてもいって言ってくれたんで」

吟子「三か月すぎたらどうすんのよ」

璃音「それは……」

吟子「使い捨てにされたんやあんたは、よう覚えとき」

幸仁「な、強烈だろうちの社長。俺と学生時代演劇部でいっしょだったんだ。俺がなんとか役者で飯食えてるのもこいつのおかげだ」

吟子「居心地悪いんやろ、今、寮で」

璃音「はい——ご飯は、もうわたしの分用意されてないし、洗濯機とかも使わせてもらえなくて、靴とか隠されて……あの、わたし」

上目遣いで吟子を見る璃音。

吟子「はつきり言います。うちの事務所にあなたを所属させるわけにはいきません——ただ飯食いどころか、厄病神入れるみたいなものな」

幸仁「おい、牧村」

吟子「なんや今の目。ゲエ出るわ。下心まる出しやん。ちょっと顔がええからってチャホヤされてきたんがよう分かるわ」

俯く璃音。

璃音「……じゃあ、ほっといてくださいよ。女が一人で生きていく方法なんて、いくらでもありますよ」

手を伸ばし親指で颯の鼻を弾き上げる吟子。

璃音「うぐっ！」

吟子「世間知らずのクソガキがなに言う тоннねん」

幸仁「自棄になつてはダメだ鈴城さん。まずは食べなさい。考え事はおなかを満たしてからだ」

無言でテーブルの上の料理を見る璃音。

× × ×

したたか酔っている幸仁と吟子。

幸仁「じゃあ本当に彼女をしばらく事務所で住まわせてやってくれ
るんだな」

吟子「じゃあなあい。窮鳥懐に入れば獵師も殺さず、いうやつや。

仮眠室のベッドで寝るんやで。食事は自炊や。ええな」

璃音「はい。ありがとうございます」

吟子「ハナからこうさせるつもりでうち呼んだんやろ、あんた」

幸仁「ははは」

旨そうにビールを啣る幸仁。

吟子「さて、でそこから先や。いつまでも事務所に寝泊まりさせと
くわけにもいかんしやな——（璃音をじつと見て）モデルや芸能
の仕事に未練あるんか、あんた」

璃音「それは……」

吟子「あるんやな」

こつくりと頷く璃音。

吟子「あかん」

璃音「え」

吟子「さっきの目を見て分かった。小三からモデルやつてきた言う
てたな」

璃音「はい」

吟子「垢がこびりつきすぎや、あんたには。東京と業界のしょーも
ない垢や。それを一回全部落とさんことには話にならんわ。あんな
たみたいな目をした子、山ほどみてきた。けど、ものになったの
は一人もいてへん。言うたる。今度のお父さんのことがなくても

あんたは消えてたはずやわ」

璃音「……」

吟子「そりやなあ——」

腕組みし目をつむって考えている吟子。

やがてニヤーっと笑い目を開ける。

璃音「おい、牧村」

吟子「(璃音を見て) 稲島って知ってる?」

璃音「いえ」

吟子「瀬戸内海の小島。わたしはそこで生まれて高校卒業までそこにいた」

幸仁「ああ、言ってたなあ」

吟子「あんたそこに行き。身元引受人にはわたしがなったげるから」

璃音「え、どういうことですか」

吟子「わたしの通った分校がある。全校生徒八十人。地元の子も通ってるけど、不登校やら、元ヤンキーとか、そんな子も受け入れてる高校や。うちの同級生のお姉ちゃんが旦那さん亡くしてから学校の用務員やっててな、そんな子いたらいつでも紹介してっ
て言われてたんよ」

璃音「わたしが、そこに」

吟子「そりや。小さい寮もあるけどいっぱいやから、その人の家に住むことになる」

璃音「……嫌です、わたし、そんなところ嫌です」

吟子「そうか。けどわたしが思いつくのはここまでや」

幸仁「話が急すぎだよ、牧村」

吟子「せやな、確かに急やな。(厨房に向かつて) すみませーん。ハイボール、大ジョッキでお願いしまーす!」

俯く璃音。

幸仁「鈴城さん、悪い話じゃないかもしれない。事務所にいる間に、よく考えてみたらどう?」

璃音「嫌です。わたし、嫌ですよ。そんな、知らないところ。知ら

ない人のところ」

吟子「秋祭りには馬が走ってた。神馬ってやつ。これがかっこよ
うてなあ。毎年楽しみやったなあ。乗れる人がおらんようになって
なくなっけしもうたんや。かっこよかったなあ」

璃音「嫌ですよ、わたし……」

店員がハイボールのジョッキを持ってやってくる。受け取り
グビリとやる吟子。

吟子「しばらく帰ってへんから帰りたいなあ稲島——まあでも、確
かにあなたの顔やったら女武器にして生きていけるやろ。年ごま
かしたら、デリヘルでもセクキャバでもソープでも、取ってくれ
るところいっぱいあるわ。それはそれでええんちゃう。知らんけ
ど」

俯いたままの璃音。

○稲島・路上（朝）

島の細い道を分校へと歩いて行く制服姿の真央。

後ろから耀一郎と晶輔がやって来て並び歩き始める。

耀一郎「おはよう」

晶輔「おはよう木崎」

無言の真央。二人気にすることもなく。

耀一郎「知ってるか。いきなり転校生来るねんで」

真央「はあ？」

耀一郎「それがな、来るのがモデルの鈴城璃音。ちょっと前まで駐
在所の掲示板にオレオレ詐欺のポスター貼ってあったやろ。あの
子や」

真央「ふーん。知らんわ」

耀一郎「……興味ないん？」

真央「どうでもええわ」

耀一郎「どうでもええことないやん。すごいことやん。モデルで女
優やで。あゝ、本校行かんでよかったあ俺」

晶輔「俺も行かんでよかったあ」

真央「行かんかったんやなくて、行けんかったんや、あんたらは。

九九の八の段最後まで言うてみ」

スタスタ歩いていく真央。

耀一郎「それ言うなや木崎」

晶輔「ほんまやで、それは言うたらあかん」

二人、真央を追いかけるように。

○稲島・路上（夕方）

ツナギの作業着を着てヤマトガワヒヨウガを曳いて歩く真央。
道行く人に会釈をしながら。

後ろから自転車でやってきた衣川栄枝（六〇）。真央の前で立
ち止まる。

栄枝「真央ちゃん、こんにちは」

真央「あ、栄枝さん。こんにちは」

栄枝「新しい馬？」

真央「はい。ヤマトガワヒヨウガつて言います。オスです」

栄枝「そう。けど、なんや元氣のない馬やねえ。ずっと下向いて。

サクラコちゃんはいつでもシャンと首立てて、元氣よかったけど
ねえ」

真央「——はい」

栄枝「そうや。おばちゃんな、今度東京から来る女の子、家に迎え
ることになってんよ」

真央「栄枝さんが」

栄枝「うん。写真見せてもろうたけど、えらい別嬪さんや。元モデ
ルやて。聞いている？」

真央「はい」

栄枝「真央ちゃんも仲良うしたげてな」

去っていく栄枝。しばらくその後ろ姿を見送っている真央。
ヤマトガワヒヨウガを曳いて歩き出す。

○砂浜（夕方）

砂浜に立つ真央とヤマトガワヒヨウガ。

真央「ほら、これが海」

同馬、首を上げ海を見るが、すぐにうなだれてしまう。

真央「ほんまに、元気がないなあ……」

○稲島神社・境内

ヤマトガワヒヨウガを曳いて戻ってくる真央。厩の前で基之と宮司の麻生義文が話をしている。その前まで行く真央。

真央「鹿野さん」

基之「ああ、真央ちゃん」

義文を見る真央。

真央「どないしたんですか」

義文「真央ちゃん。この馬のことやがな」

真央「ヒヨウガの？」

義文「うん。わたしもこんな身でなんやけど、馬券は買う。知ってるやろ」

真央「はい」

義文「そやからこの馬に起きたことは知ってる」

真央「——疑惑の馬、ですか」

義文「そや。言うなればこの馬はいわくつきの馬や。鹿野くん。確かに新しい神馬の選定は全面的に君に任せた。けど、この馬はな いやろ、さすがに」

基之「はあ、でも」

義文「『でも』やないよ。伝統格式ある稲島神社の神馬にふさわしい馬を選んでもらえると思って一任したんやで。それをやなあ……」

真央「あの、おじさん」

義文「ん？」

真央「なんで、ヒヨウガじゃダメなんですか」

義文「それはな真央ちゃん。神馬いうのは言うなれば神様の使いや。

清廉潔白でないとならん。でもこの馬は違う。神馬としてふさわ

しくないんや。鹿野くん、早急に他の馬選んでくれるか」

基之「どうしても、ですか」

義文「ああ」

真央「じゃあ、ヒヨウガはどうなるんです」

答えない義文と基之。

真央「廃用、ですか」

やはり答えない義文と基之。

真央「なんでヒヨウガが下向いて元気がないのか分かりました。ずっ

と今みたいな言葉聞かされてきたからです——おじさん、わたし

他の馬が来たって世話しません。ヒヨウガやないと世話しません」

義文「真央ちゃん」

真央「今みたいな話、二度とヒヨウガの前でせんといってください」

同馬を厩に曳き入れる真央。その姿をじっと見ている義文と

基之。

○瀬戸内海を進むフェリー

○同・その二等客室

床に座っている璃音と吟子。

吟子「学費は全部前の事務所の社長が三年分まとめて出しよった。

三十万で厄介払いできるんやったら安いもんや思うたんやろ」

璃音「一年十万……安」

立ち上がる吟子。

吟子「お、島が見えてきたな」

デッキへ出る吟子。やがて璃音も。

○同・デッキ

並んで島の方を見る吟子と璃音。

吟子「試験は、東京で受けたんやったな」

璃音「はい。学校の先生が来て。『名前書けたら合格だから』って」

吟子「ふふ。じゃあ上陸は始めてか。海はきれい。魚は旨い。人は優しい。この世の楽園や。わたしあのまま島に残ってたら、どうやったやろう。なんか、今よりずっと穏やかな人生送ってたよう
な気がするなあ」

璃音「吟子さんは、東京が合ってますよ」

吟子「そうかなあ」

島に近づいていくフェリー。

○港

接岸するフェリー。タラップが設置され、降りてくる吟子と

璃音。港に降り立つ。そこに待っている栄枝。

吟子「いやあ、栄枝ねえちゃん、迎えに来てくれてたんや」

栄枝「久しぶりやねえ、吟子ちゃん。たまには帰っておっちゃんや

おばちゃんに元気な顔見せてあげなあかんやないの」

吟子「耳が痛い。元氣そうやねえちゃんも」

栄枝「(璃音を見て) その子が？」

吟子「うん。ほら、ホームステイ先の衣川栄枝さんや。あいさつし

て」

璃音「——鈴城璃音です」

小さく頭を下げる璃音。

吟子「なんやそれは！」

吟子の一喝。驚く璃音。

吟子「ちゃんと挨拶しなさい！ これからご飯食べさせてもらって、寝るところ与えてくれる人や！ そんな態度でどうするん！ このまま東京帰ったかてええんやで！ 帰ったらそこで放り出す！ あんたの好きに生きていったらえええ！」

栄枝「ええって吟子ちゃん」

吟子「ねえちゃん、今のでわかったやろ。世の中舐めてる子なんや。

ほら、もう一回あいさつや」

璃音「——鈴城璃音です。これからよろしくお願いします」

頭を下げる璃音。

吟子「なんでそれが最初からできんのや」

頭を上げる璃音。穏やかに笑っている栄枝。

○栄枝の家・外景（夜）

分校の敷地内にある栄枝の家。古ぼけた一軒家。

○前同・風呂（夜）

湯船につかっている璃音。

璃音「——？」

音。やがてそれが波の音だと気づく。

耳を澄ませる璃音。

○前同・居間

栄枝の心づくしの手料理が並んだ座卓の前にして差し向いで座っている璃音と栄枝。璃音、浴衣を着ている。

栄枝「うかつとしてパジャマ買うの忘れてたんよ。今日はそれでごまんしてな」

璃音「いえ、かわいいです」

栄枝「うん、よう似合ってるわ。さすがモデルさんや。けど吟子ちゃんえらそうになあ。笑ってしまうわ。あの子な、今は岡山に居るうちの妹とつるんで悪さばかりやってたんやで。島のヤンキーやっつてんよ」

栄枝、微笑んで璃音を見て。

栄枝「璃音ちゃん」

璃音「はい」

栄枝「あなたのお父さんがなにをしたか聞いている」

璃音「はい」

栄枝「おばちゃんからも一つだけ訊いてええかな」

璃音「はい」

栄枝「お母さんとは、死別？」

俯く璃音。

栄枝「言いたなかつたら、言わんでええんよ」

璃音「……母は、わたしが四つのときに家を出ました。他の男性と

いっしょにです」

栄枝「そう」

璃音「酔うと父がよく言っていました。『あいつは多情で奔放な女だ

った』って。実際そうだったと思います。父が酒やギャンブルに

逃げたのも、元はと言えば母がそんな女だったからです」

栄枝「嫌なこと訊いてしもたね。ごめんね」

璃音「いえ、いいんです」

栄枝「璃音ちゃん」

璃音「はい」

栄枝「隣の部屋に仏壇があったのに気づいた？」

璃音「あ、はい」

栄枝「あれね、三年前に亡くなったうちのひと、二十年前に亡くな

った息子夫婦お祀りしてるんよ」

璃音「息子さん夫婦」

栄枝「うん。嫁の美菜子ちゃんがかも膜下出血で急死してね。その

半年あと息子の昭幸が後追って自殺したんよ」

璃音「自殺……」

栄枝「うん。心を病んでもうてなあ」

璃音「……」

栄枝「その浴衣ね、わたしが美菜子ちゃんのために拵えてやったも

んや。あの子も璃音ちゃんに着てもらって、喜んでくれてるわ、

きつと——高校出てすぐ結婚してんよ。美男美女のカップルやつ

てんでえ。後で手を合わせてやってな」

璃音「はい」

栄枝「璃音ちゃん、あんたはあんたや。拗ねたらあかんで」

璃音「——はい」

栄枝「うん。そしたら食べようか。張り切りすぎて作りすぎてしてもうたわ」

璃音「——いただきます」

栄枝「はい、いただきます」

食べ始める二人。やがて璃音、泣き始める。泣きながら、食べる。

璃音「おいしいです……」

栄枝「そう、ありがとう。おかわりしてな」

璃音「はい、します」

栄枝「ゆっくりお食べ」

璃音「はい。おいしい。本当においしいです……」

泣きながら食べ続ける璃音。璃音を優しい眼差しで見る栄枝。

○稲島分校・一年A組教室

教壇、担任教師の横に立ち紹介を受けている璃音。頭を下げ。ひととき大きな拍手をする耀一郎と晶輔。

担任「席は一番後ろの木崎の隣や。じゃ、座って」

璃音「はい」

用意された自席まで歩く。璃音。真央に小さく会釈。真央も小さく会釈を返す。席に着く璃音。二人無言のまま。

○前同・学生食堂の厨房

こじんまりとした学生食堂、その厨房。

割烹着を着て仕込みをしている栄枝。それを手伝い、ねぎを切っている同じく割烹着姿の璃音。

栄枝「そうか。真央ちゃんの隣の席か」

璃音「はい」

栄枝「ええ子やよあの子。ちっさい時から馬の世話してるんよ」

璃音「馬？」

栄枝「稲島神社の神馬。前の馬が死んで新しい馬が来たところや。

昭幸な、神馬の乗り手やったんよ、秋祭りの」

璃音「ああ、吟子さんが言ってた」

栄枝「中学校入ってすぐ乗り手になって二十一で亡くなるまで。そりやもう惚れ惚れするくらいやったわ」

璃音「そうなんですか」

栄枝「けど真央ちゃん、仲良かった泉美ちゃんが大阪の学校行ってしもてなんや寂しそやなあ、最近」

璃音「馬か……」

栄枝「けどええ手つきやなあ。さすが子供のときから料理してただけのことある。美人で料理上手、最強やん璃音ちゃん」

薄く笑って首を横に振る璃音。

○村田ストアー

小さな食料品や雑貨を売っている店。

買い物をしている璃音。

ストアーの女店主、村田忍（79）が杖をついて側までやってくる。

忍「あんたか、東京から来て栄枝の家に住んでるいう子は」

璃音「はい」

忍「名前は？」

璃音「鈴城璃音です」

メモ帳とペンを懐から出し、璃音に差し出す忍。

忍「漢字で名前書き」

璃音「え」

忍「ええから早よ書き」

璃音、メモ帳を受け取ると自分の名前を書いて忍に返す。忍、受け取るとなにやらペンで書き始め、しばらくブツブツ言っている。

璃音「あの——」

忍「黙ってい」

忍、ブツブツ言い続けるが、やがて顔を上げて璃音を見て。

忍「ええ名前や」

璃音「はい？」

忍「ええ名前や言うとする。吉凶は半ばしとる。けどな、下手うっても立ち直れる名前や。助けてくれる人の縁に恵まれる名前や。誰がつけてくれたんや」

璃音「——父だそうです」

忍「そうか。お父ちゃんに足向けて寝られんな」

忍、笑う。

璃音「はあ」

複雑な面持ちの璃音。

○路上

買い物袋を前かごに入れ、自転車をこぐ璃音。前からヤマトガワヒョウガを曳いてやってくる真央。
目が合う二人。小さく会釈をしてすれ違う。
ブレーキをかけ止まる璃音。振り返り遠ざかる真央と同馬の姿をじっと見送る。

○分校・一年A組教室【翌日】

英語の授業中。

璃音「あの、木崎さん」

真央「え」

見つめあう二人。

璃音「昨日の馬が神馬？」

真央「あ、うん。そう。ヤマトガワヒョウガ。ついこの前来たばかり」

璃音「そっか。毎日世話してるの？」

真央「うん」

璃音「神社にいるの？」

真央「そう」

璃音「そっか。あの、今日さ、見に行つていいかな」

真央「え、ヒョウガを？」

璃音「うん」

真央「馬、好きなの？」

璃音「うん、まあ」

真央「べつに、いいけど」

璃音「ありがとう」

話をする璃音と真央を見とがめる英語教師。

教師「おーい、木崎、鈴城。仲良うなるのはけっこうやけどなあ。

授業はちゃんと聞いてくれえ」

笑いに包まれる教室。うつむく二人。

○稲島神社・厩の中

ヤマトガワヒョウガにブラッシングをしている真央。気配を

感じ、顔を上げる。厩の前に璃音が立っている。

璃音「こんにちは」

頷く真央。

真央「手水舎で手を洗った？ 洗ってなかったら——」

璃音「洗った」

真央「洗ったんや」

璃音「うん。だって神社だし。それにこの馬神様の馬なんですよ。

だったら」

まじまじと璃音を見る真央。

真央「今から散歩に行くところなんよ。一緒に来る？」

頷く璃音。

○前同・境内

ヤマトガワヒョウガを曳いて歩く真央。
少し離れて璃音も。

義文がやってくる。

義文「今から散歩か、真央ちゃん」

真央「はい」

義文「彼女は？」

真央「鈴城璃音さん。東京からここへ」

義文「ああ、聞いているわ。衣川さんところに住んでるんやってな」
璃音「はい。鈴城です」

頭を下げる璃音。

真央「あの、おじさん。ヒョウガのことなんですけど」

義文「ああ。このままここに置いとくわ」

真央「本当ですか」

義文「納得してるわけやないけどな。これもなにかの縁やろ。真央
ちゃんにあそこまで言われたら置いとかなしゃあないやろ」

真央「ありがとうございます」

義文「しっかり面倒みてな、頼んだで」

真央「はい」

義文「あ、泉美今度のゴールデンウィークに帰ってくるそうやな」

真央「え、そうなんですか」

義文「なんや、聞いてないんかいな。連絡とったりしてへんのか」

真央「はい、あまり」

義文「泉美のことはなんでもおっちゃんより先に知ってたやんか。
向こうでできた友達四人連れて帰ってくるらしいわ」

真央「そうですか」

義文「二日泊まるらしい。ご飯食べさせないかん。うちは旅館やな
い言うねん、なあ」

嬉しそうな義文。

真央「じゃあ、散歩に行つてきます」

義文「うん」

ヤマトガワヒョウガを曳いて、境内を出ていく真央。後ろから璃音がついて歩いていく。

○椎美ガ浜

海を前に真央、璃音、ヤマトガワヒョウガ。

璃音「疑惑の馬、か」

真央「うん。誰かにカフェイン飲まされただけやのに、そんな言われて引退した」

璃音「そう」

璃音、じつと海を見ている。

真央「この馬がずっと下向いて元気なのは、人間が自分のこと悪く言う言葉ばかり聞かされてきたからなんや」

璃音「え」

真央「そうなんや、絶対」

璃音「——うん」

真央「笑わへんの？」

璃音「だって、そう思うから」

二人、下を向いているヤマトガワヒョウガを見つめる。

璃音「分かるよね馬、人間の言ってること。わたしも馬に乗っていいことあるから分かる」

真央「え、なにそれ？」

璃音「乗馬、やってたから」

真央「そうなんや。だから馬が好きなんか」

頷く璃音。

真央「だったら、今ヒョウガにも乗れる？」

璃音「え。それは無理だよ。鞍もないし鐙（あぶみ）もないもん」

真央「そっか——人乗せても、元気にならへんのかな、この馬」

砂浜にたたずむ二人と一頭。

○稲島港

乗り着き場で待っている真央。

フェリーが近づく。

フェリーのデッキに立っている泉美。

泉美「真央——っ！」

大きく手を振る泉美。その隣に立っている四人の女友達。

手を振り返す真央。

着岸するフェリー。降りてくる泉美と四人。

○路上

前を歩く泉美の友人四人組。少し遅れて真央と泉美が並んで。

泉美「サクラコは、残念やったね」

真央「うん」

泉美「ライン見てびっくりした。真央のこと、心配やったよ」

真央「うん。ありがとう。もう大丈夫」

泉美「新しい馬、もうここに慣れた？」

真央「かなあ。元氣のない馬なんよ」

泉美「元氣ないのん？ 病氣？」

真央「そうやないんやけど」

泉美「ふーん。サクラコはいつも元氣いっぱいやったのになあ」

立ち止まった四人が振り向き、「どっちい？」と泉美に道を尋

ねる。駆け出し、四人に並ぶ泉美。並んで歩き始める。

にぎやかに前を行く泉美と四人組の背を見ながら歩いて行く

真央。

○稲島神社・境内

ヤマトガワヒヨウガを厩から曳き出してくる真央。四人が飲

声をあげる。

泉美「これが新しい神馬」

真央「うん。ヤマトガワヒヨウガ」

スマートフォンで同馬と自分たちを撮影する四人、そして泉

美。その様子を黙って見ている真央。

○前同・能舞台

巫女の装束を着て能舞台の上ではしゃぐ四人と泉美。スマートフォンで写真を撮りあっている。その様子を舞台の外からじっと見ている真央。

○前同・厩

ヤマトガワヒョウガに飼葉を与えている真央。

巫女装束の泉美がやってくる。

泉美「真央」

振り向く真央。

泉美「今日な、今からみんなでご飯食べてお風呂入ってな、うちの
大広間に布団敷いて寝るんよ。真央も泊まらへん？」

真央「え——ううん、わたしはええよ」

泉美「遠慮せんでええんよ。みんなええ子らやよ」

真央「うん。でも、ええよ」

泉美「うん、そっか」

真央、作業に戻る。

泉美「そうや、明日みんなでのこの馬の散歩について行ってもええ？」

真央「べつに、ええよ」

泉美「ありがとう。そしたらね」

真央「うん」

厩を出る泉美。作業を続ける真央。

○椎美ガ浜【翌日】

砂浜ではしゃぐ四人組と泉美。その様子を見ている、真央、
ヤマトガワヒョウガの手綱を持ってその様子を見ている。

○路上

帰っていく六人と一頭。

買い物袋を籠に入れ、前から自転車でやってくる璃音。

すれちがう。璃音と真央、少し見交わして。

ユイ「え、ちよつと今の——」

璃音の方へ駆け出すA。

ユイ「待って、ちよつと待って」

ブレーキをかけ止める璃音。

ユイ「あなた、鈴城璃音ちゃんやんね！」

無言の璃音。他の四人も駆け寄ってくる。

ユイ「やっぱりそうや！」

カレン「鈴城璃音ってあの鈴城璃音！？」

アンナ「うわっ、ほんまや！」

ホナミ「なんで、なんで?! てか、やっぱめっちゃかわいい！」

ユイ「わたし璃音ちゃんが出たファッションショーに行ったこと

あるんよ! うわあ、信じられへん！」

カレン「ちよつと、だれか紙とペン持ってない? サインサイン！」

アンナ「いっしょに、写真撮ってええよね！」

うつむいている璃音。

璃音「ごめんなさい。もうそういうのは……失礼します」

去っていく璃音。

ユイ「えゝなんでえ」

ぶつぶつ言いながら戻ってくる四人。

泉美「今の、ほんまに鈴城璃音？」

真央「うん。この前転校してきた」

泉美「教えてくれてもよかったのに」

真央「そつとしといてあげたいから」

小さくなる璃音の後ろ姿をじっと見ている真央。

○栄枝の家・入口

自転車を止め、家に入る璃音。

○同・仏間

買い物袋を床に置く璃音。仏壇を見る。
栄枝の息子、昭幸と妻の美菜子が顔を寄せ合って微笑んで
いる写真を見る。

仏壇の前に座る璃音。

二人の写真の隣に、神馬に乗った武者装束の昭幸のスナップ
写真が小さな額に入れて立てられているのに気づき、手に取
る璃音。

凛々しい昭幸の姿をじっと見つめる。

○港

出港するフェリー。デッキに立ち大きく手を振っている泉美
と四人。船着き場に立ち、手を振り返している義文と妻の涼
子。真央。

フェリー、遠ざかっていく。

義文「帰っていったか」

涼子「賑やかいことやった」

義文「まあ、早いうちから友達大勢できたのはなによりや」

涼子「そうやね——真央ちゃん、帰ろうか」

真央「はい」

歩き出す三人。

○路上

並んで歩いていく三人。椎美ガ浜のあたりまで来る。浜にた
たずむ璃音に気づく真央。

真央「おじさん、おばさん。わたし、ここで失礼します」

義文と涼子に頭を下げ、浜へ歩いていく真央。

○椎美ガ浜

海を見ている璃音。振り向く璃音。

並んで立つ二人。

真央「昨日はごめん」

璃音「え——ああ、木崎さんが謝ることじゃないよ」

真央「よう来るん、ここ？」

璃音「うん。この前からときどき。なんか、気持ちが落ち着くって
いうか」

真央「うん。わたしも。何回見ても飽きひんわ、椎美ガ浜の海だけ
は」

璃音「木崎さん、寂しい？」

真央「え、なにが？」

璃音「泉美さんが、大勢友達連れて帰ってきて」

真央「ああ——うゝん、どうやら。微妙なところやなあ」

璃音「微妙？」

真央「うん、微妙。泉美もそう思ってたのどちがうかなあ」

璃音「そっか」

璃音「ねえ、木崎さん」

真央「なに」

璃音「わたしもときどきヒョウガの散歩について行ってもいいかな」

真央「え、うん。ええよ」

璃音「ありがとう」

真央「なあ、あそこずっと岩場が続いてるやろ」

指さす真央。

璃音「うん」

真央「夏はこの浜も海水浴場になってな、けっこう人がくるんよ。

で、あの岩場までが遊泳区域」

璃音「へーえ」

真央「岩場の終わりがトンカチ岩。なんかトンカチみたいになって
るやろ」

璃音「うん」

真央「わたしと泉美な、夏になったらあそこから飛び込んだんよ
毎朝。トンカチ岩の下ってすごく深くなってるん。二人でいつ
も朝に飛び込んだ」

璃音「朝に？」

真央「うん。海水浴のお客さんが真似して、事故があったらあかん
やろ。そやから飛び込んだらアカンことになってるんよ。そやか
ら誰も見てへん朝の六時に飛び込むんよ。二人だけの秘密やった」

璃音「六時い？ 水冷たくないの」

真央「すごい冷たい。でも一回跳んだら慣れる。あとは気持ちええ
ばっかりや。アホみたいに何回も何回も飛び込むんよ」

璃音「でも、なんか怖そう」

真央「鈴城さん、泳ぎは？」

璃音「けっこう得意なほう」

真央「そうなんや」

二人、じつとトンカチ岩を見つめて。

(大写しになる二人の横顔)

○椎美が浜(早朝)

(〜時間経過・前場面から続きで大写しになっている二人の

横顔)

砂浜に並び立っている真央と璃音。スクール水着を着た二人、
よく日に焼けている。

真央「よー……」

璃音「いドン！」

先に駆け出す璃音。

真央「あっ、こら璃音！」

駆け出す真央。二人海に飛び込む。

○海

クロールでトンカチ岩を目指す二人。悠々と泳いでいく。

○トンカチ岩

先にたどり着く璃音。天然の足場のある岩壁を四肢を使ってガジガジとよじ登っていく。真央も。

岩の上は一畳半ほどの平場。そこに立ち両手を広げる璃音。

璃音「いっちばーん！」

真央「ズルやんか！」

璃音「ズルでもいっちばーん！」

璃音、平場の端に立ち、高く跳ね足から海に飛び込む。

璃音「きゃーっ！」

すぐさま真央も。水音。高く上がる大きな二つの波しぶき。浮き上がった二人の嬌声。

× × ×

平場に並んで横になっている二人。

璃音「真央の言ったとおりだった」

真央「ん？」

璃音「ここから飛び込むのマジで最高」

真央「あんたそれ、昨日も同じこと言うたで」

璃音「そうだった？」

真央「うん。てか、もうそれ聞き飽きた」

璃音「だって最高だもん」

笑いあう二人。

璃音「ねえ」

真央「ん？」

璃音「泉美さん、夏休み帰ってくるの？」

真央、しばらく空を見上げているが、やがて首を横に振る。

璃音「こないの？」

真央「うん。おととい久しぶりに電話かかってきてな。別荘のハシ

ゴするんやって言うてた」

璃音「なにそれ？」

真央「五月にいつしよに帰って来た四人の子らの家、みんな別荘持
ってるんやっ。そこに夏休み間ずっと代わる代わる泊るって」

璃音「はああセレブう」

真央「『別荘ないのうちだけで恥ずかしい』とか言ってたわ泉美」

璃音「へーえ」

真央「泉美な、自分のこと『一軍』って言うんよ」

璃音「一軍、か」

真央「うん——前にな、泉美のこと『微妙』って言うたやん、わた
し」

璃音「うん」

真央「今はもつと微妙や」

空を見上げている真央を見る璃音。

真央「あんな璃音——」

璃音「うん」

真央「あんな、そのとき泉美がな」

璃音「うん」

黙ってしまふ真央。じつと言葉を待つ璃音。

真央「——『犯罪者の子供なんかと付き合わへん方がええ』って」

璃音「そっか」

真央「そんなこと言う子や、なかったのにな……ごめんな、言うて
ごめん……ごめんな」

璃音、真央をじつと見て。

璃音「よっこいしょ」

立ち上がる璃音。

璃音「あくあ、わたしも一軍中の一軍だったんだけどなあ」

璃音を見上げる真央。

璃音「一軍様たちが来たら今度はサインしてあげてもよかったんだ
けど。元ウルトラ一軍、鈴城璃音って書いて。ははっ」

真央「璃音」

体を起こす真央。

璃音「昨日、耀一郎さんと晶輔くんがね、釣った魚、刺身にして持ってきてくれたの。ベラって言ってた。すごくおいしかった」

真央「あの二人が」

璃音「うん。わたしが来る前から栄枝さんによくお刺身持ってきてあげてたんだって。いい子たちだよね」

真央「アホやけどな二人とも。漢字読まれへんし、九九言えへんし。

理科の実験で髪の毛燃やすしな。近所の犬にちよつかい出して服ビリビリにされたこともあったわ。中二のときやで。稲島最強のアホコンビや」

ひとしきり笑いあう二人。

大きく伸びをする璃音。

璃音「ベラはおいしいし、トンカチ岩は最高だし——」

岩から跳ぶ璃音。水音。

立ち上がった真央も飛び込む。

波しぶき。浮き上る真央。璃音の前に浮かび上がる。

璃音「真央はいるし！」

真央、璃音をじっと見て。いきなり璃音の頭に手をやり、海中へ押し込む。

逃れた璃音。やり返す。二人の嬌声が続く。

○防波堤

釣り竿を出している耀一郎と晶輔。

二人の後ろから二人の男が近づいてくる。

○路上

歩いて行く耀一郎と晶輔。その後ろからついて歩く二人の男、新山（38）と加納（32）。加納はカメラを首から下げている。

○稲島神社

鳥居をくぐる四人。手水舎で手を洗う耀一郎と晶輔。

新山「へーえ」

耀一郎「これやらんと木崎に怒られる」

新山「木崎って、ヤマトガワヒヨウガ世話してる女の子？」

耀一郎「そう」

新山「彼女に話し、訊けるかな」

耀一郎「大丈夫やと思うで。学校から帰ったら、いつも散歩させるから」

四人、ヤマトガワヒヨウガの馬房へと歩いていく。

○前同・ヤマトガワヒヨウガ・馬房

ヤマトガワヒヨウガの写真を撮っている加納。

新山「じゃあ、鈴城璃音さんもこの島に居るんだね」

耀一郎「そうや。俺ら釣った魚、よう持って行ってやってるんや。なあ」

晶輔「うんうん。この前はメバル持っていった。煮つけにしてな。

すごい喜んでたわ」

加納「(新山に) 思わぬおまけがついてきましたね」

新山「ああ。鈴城遥平の娘がヤマトガワヒヨウガ散歩させてるんだ。

記事にもなるし絵にもなる」

耀一郎「あ、木崎と鈴城来たで」

馬房まで歩いてくる真央と璃音。

真央「なにやってんのよあんたら」

真央、不審げな顔で新山と加納を見る。

耀一郎「雑誌の記者とカメラマンやって。ヤマトガワヒヨウガのと訊きたいそうや」

新山「はじめまして」

麻央に名刺を渡す新山。(週刊春潮)の文字。名刺をじつと見る真央。

新山「木崎真央さんだね。で、そっちの彼女は鈴城璃音さん。二人、

少しお話訊かせてもらえないかな」

加納「写真もお願いしたいんだ。ヤマトガワヒヨウガといっしょにさ」

新山「グラフィア記事の取材してるんだ。いやあ、でもびっくりした。

鈴城さんがこの島にいるなんてさ。お父さんのところに面会に行ったりしてるの?」

璃音、駆けだす。

新山「あ、ちょっと!」

走り去る璃音。真央、新山をにらみつける。

真央「帰れ……」

名刺を破り捨てる真央。息を飲む四人。

真央「帰れっ!」

真央、掃除用の竹ぼうきを手に取り新山と加納に向け振り回す。

新山「うわっ!」

真央「帰れ、帰れ、帰れえっ!」

後ずさる新山と加納。

加納「新山さん、こりゃちょっと……」

新山「わ、分かった木崎さん。帰る帰る。いい記事にするから楽しみに待っててね」

立ち去る新山と加納。

真央、荒い息を吐きながら、呆然と立っている耀一郎と晶輔を睨みつける。

耀一郎「あ、あの木崎」

真央、猛然と竹ぼうきで二人の背を打ち据えはじめる。

耀一郎「うわっ!」

晶輔「や、やめえや木崎!」

真央「アホや! アンタらはほんまもんアホや!」

境内に逃げる二人を追い回し、竹ぼうきを振り下ろし続ける真央。

耀一郎「やめえ、やめえて木崎！」

晶輔「やめてくれえ！」

真央「ほんまに、ほんまにアホお！」

泣きながら二人を追い回し竹ぼうきを振り回す真央。

○栄枝の家・居間（夜）

食事をしている吟子、璃音、真央。

真央、不機嫌な顔で食べている。旺盛な食欲。

栄枝「許したりいな、真央ちゃん」

真央、首をぶんぶんと横に振る。

璃音「うん。わたし、気にしてないから」

真央、ぶんぶんと首を横に振る。栄枝と璃音、顔を見合わせ笑う。

真央「アホやアホや思ってたけど、あそこまでアホとは思わなかった、あの二人」

栄枝「悪気があってやったことやないんやし」

真央「悪気がないから余計たちが悪い」

仏頂面で食事続ける真央を微笑んで見ている璃音。

○防波堤（夜）

並んで釣り竿を垂らしている耀一郎と晶輔。

耀一郎「晶輔やあ」

晶輔「んう」

耀一郎「ベラやメバルでは許してもらえんぞ」

晶輔「分かってる」

耀一郎「晶輔やあ」

晶輔「んう」

耀一郎「アホやなあ俺ら」

晶輔「そやなあ」

無言の二人。

耀一郎「おっ……」

水面のウキが沈む。

竿を合わせる耀一郎。大きくしなる竿。耀一郎、リールを巻いていく。

耀一郎「ごっついぞ、これ」

晶輔「慌てんな。ゆっくりな」

晶輔、タモを手にする。耀一郎、格闘しばし。やがて水面にその魚影。

耀一郎「チヌや！」

晶輔「四十センチあるぞ！」

タモで掬い上げる晶輔。釣りあげる耀一郎。

耀一郎「やった！」

晶輔「やったな！」

耀一郎「なにが旨い!？」

晶輔「一晩寝かせて、薄造りに洗いにカルパッチョにムニエルや！」

耀一郎「ええやないか! 木崎も鈴城も喜ぶで! 早よシメろシメろ!」

晶輔「よっしゃ、まかせろやあ!」

暗闇の中、大喜びの二人。

○大阪・××学園

放課後、生徒たちが帰っていく。

○下校の道

肩を並べて歩いていく泉美と男子生徒のショウ。

寮の前まで来る二人。しばらく楽しそうに話す。

手を振りあう。寮へ入って行く泉美。

ショウ、名残惜し気に去っていく。

後ろからその二人を見ていた四人。ユイが潤んだ目で唇をかみしめている。

カレン「ありえへん。なんなんあの子」
アンナ「知ってたやんね、ユイがショウくんのこと中等部の頃から
ずっと好きやったって」
ホナミ「うん。最初に教えたんわたしやもん」
カレン「田舎もんが調子こいてるんやないわ」
ユイ「――許さへん、絶対」

○稲島・椎美が浜

ヤマトガワヒヨウガと真央、璃音。

同馬、鞍を乗せ、鐙をつけている。

璃音「よっ」

柔らかに飛び上がり同馬に乗る璃音。

璃音「あー、久しぶり。やっぱり気持ちいい。馬の上って。ほうッ、

ヒヨウガ」

ヒヨウガ、ゆっくりと歩き出す。

真央「おー、やるやん」

璃音「馬術広報大使だもんで」

真央「元、な」

璃音「うるさい」

楽し気な璃音。

真央「栄枝さん、鞍とかよう遺してたね」

璃音「だって形見だもん」

真央「うん」

同馬に速足をさせる璃音。

真央「おっ」

璃音「ふふっ。これがトロット」

しばらくの速足の後。駆け足に入る璃音。

璃音「次、キャンター」

ゆっくり走り始めた同馬。

璃音「ギャロップ！ 襲步って言うの！」

真央「うわ……」

同馬とギャロップを続ける璃音。やがて――

璃音「ほうッ！ ヒョウガ、ほうッ！」

同馬、反応する。勢いよく走りだす。

手綱をしっかりと握る璃音。砂浜を駆けていく人馬。

真央のいるところから遠く離れて璃音とヤマトガワヒョウガ。

璃音「真央――ッ」

真央「なに――」

璃音「ヒョウガ、元気いっぱいだよ！　すごく走りたがってる！」

真央、何度も頷く。

人馬に向かって駆け出す。

○椎美ガ浜

砂浜に引かれているスタートライン。

耀一郎、晶輔、ヤマトガワヒョウガに騎乗した璃音。二百メ

ートルほど先に立っている真央。

真央、手を振り上げ、振り下ろす。走り出す耀一郎と晶輔。

璃音「いち、に、さん、し、ご、ろく、なな、はち、きゅう、じゅ

う――ヒョウガ、ゴウッ」

走り出す人馬。颯爽と。

あっさり二人を抜き去る。ゴールラインを駆け抜ける。力な

く砂浜に倒れこむ二人。

真央「こら――ッ、最後まで走れ――！」

璃音、馬上で振り向いて。

璃音「耀一郎くん、晶輔くん！　約束どおりチヌのお刺身だよ！」

二人、突っ伏したままで。

耀一郎「か、か、勝てるかあ……」

晶輔「チヌは、簡単に、釣れん……」

嘶くヤマトガワヒョウガ。

○大阪・スーパーマーケット

お菓子売り場にいる泉美と四人。誰もがそこに目を配っている。

泉美（声）「ユイ、ごめん」

ユイ（声）「え、なにが」

泉美（声）「だから、ショウくんのこと——」

ユイ（声）「ああ。そんなのええって。好きやったのは中等部るとき。

今はなんとも思ってたへんから」

泉美（声）「本当に？ わたしショウくんからコクられたとき、すごく迷って。ユイがショウくんのこと好きやって知ってたから」

ユイ（声）「そやからそれは前の話しやって。気にせんでもええんよ」

泉美（声）「よかった」

ユイ（声）「それよかさ泉美、一回わたしらのやってたゲームやって

みいひん？」

泉美（声）「ゲーム？」

カレン（声）「あれはドキドキするもんなあ」

ユイ（声）「人間ユーフォーキャッチャー。わたしがクレインにな

ってな、商品ゲットするねん」

ホナミ（声）「中等部るときみんなどうやってんよ」

泉美（声）「商品ゲットって、あの、それって——」

ユイ（声）「大丈夫やって。うちのお店でやるんやもん。みんな見張

ってるし」

アンナ（声）「わたし一回失敗した。お店出てすぐ店員に声かけられ

てな。けどユイの友達やって分かったらなんもなしや」

泉美（声）「そうなんや」

C（声）「会長、ユイにメロメロやもんな」

ユイ（声）「わたしがソツコー電話かけて許したってっていうたら、

それで終わりや。わたしのことやったらなんでも言うこときくん

や、おじいちゃん」

ホナミ（声）「けどめっちゃスリルあるで」

ユイ（声）「なあ、一回泉美もやってみる？」

泉美（声）「——うん」

通路に散らばっている四人。彼女たちと目配せする泉美。グミを万引きする。足早に立ち去る。四人も。

○スーパー駐車場

駐車場の片隅。合流する五人。固まって。

泉美「あー、ドキドキしたあ」

ユイ「な、めっちゃドキドキするやろ」

泉美「うん。まだ心臓バクバクいつてる」

カレン「うまいことゲットできたやん」

泉美「不安やったけどみんながいてくれたから、心強かったわ」

アンナ「なに取ったん？」

バッグの中からグミを取り出す泉美。

ホナミ「なんやあ、グミかあ。シヨボいなあ」

ユイ「そんなん言ったりなや。これは勝利のグミや。なあ泉美」

笑顔の泉美。

○稲島高校・一年A組

始業前。机に座り浮かない顔で頬杖ついている真央。璃音が来る。

璃音「おはよう——どうしたの」

椅子に座る璃音。

真央「うん」

学生カバンから雑誌を取り出し雑誌を見せる真央。

璃音「『週刊春潮』。これって」

真央「この前の記者が書いた記事が載ってるんよ。ヒョウガの写真

も——璃音のこともちょっと書いてある。読む？」

璃音「うん」

ページをめくり璃音に渡す真央。グラビア記事に目を落とす

璃音。

璃音「——ふふ、うん」

真央「璃音なんかまだましやで。最後の方読んでみ」

璃音「え——『薬物疑惑に塗れた同馬が、神馬としてふさわしいかどうか大いに疑問である。世話をする女子高生にも話を聞こうとしたが、名刺を破り捨てられた上、暴力まがいの対応をされ、叶わなかった。この馬にしてこの子あり、といったところだ。とまれ平安の御代から続くという伝統ある稲島神社である。疑惑の馬ヤマトガワヒョウガをこのまま神馬として存在させ続けることは、再考の余地があるように思われてならない』——ちよつと、なにこれ。ひどい」

真央「な。なにが『この馬にしてこの子あり』や。もっとシバきあげてたらよかった——あさって稲島神社の氏子青年会の集まりがあつて、ヒョウガどうするか決めるんやつて。基之さんが教えてくれた」

璃音「氏子青年会？」

真央「七人いてる。オッサンばかりや。六十手前の人もいてる。

どこが青年会や」

璃音「真央も出れるんでしょ」

首を横に振る真央。

璃音「そんな。ヒョウガの世話してるのは真央なのに」

真央「有名な雑誌にこんなこと書かれたら余計に出られへんわ。基之さん、今度はアカンかもつて言つてた」

璃音「アカンつて、ヒョウガが？」

真央「うん。ほんまに、神馬やなくなるかもしれへん」

璃音「どうするの？」

真央「とりあえず、泉美のおっちゃんに頼んでみるけど……」

璃音「わたしも一緒に行く。今日散歩に行く前に行く」

真央「うん。ありがとう」

璃音「——ふふっ」

真央「ん？」

璃音「いつまでも『泉美のおっちゃん』なんだね」

真央「え？『泉美のおっちゃん』やもん」

璃音「お正月は帰って来るんでしょ、泉美さん」

真央「その前に秋祭りには帰ってくる」

璃音「秋祭りっていつ？」

真央「十月の十日」

璃音「来月じゃない。やっばり微妙？」

真央「——かもしれんけど、でも、泉美はこの島の巫女やから。泉

美は舞いを舞わなあかんから」

じゃれあいながら耀一郎と晶輔が入ってくる。

真央「——耀一郎、晶輔！」

耀一郎「おお、おはよう！」

真央「おはよう、ちゃうわ！はよチヌ持ってこいどアホ！」

晶輔「そやからチヌは、そない簡単に釣れへんって言うてるやん」

真央「釣れへんでも持ってこい！」

耀一郎「むちゃ言うなや」

璃音「持ってこーい」

晶輔「鈴城まで……」

笑う真央と璃音。

○大阪・スーパーマーケット

菓子売り場。通路の四隅に四人。彼女たちと目配せをする泉

美。泉美、しばらく物色の後、板チョコレートを万引きする。

顔を上げ周りを見渡す。四人はいなくなっている

泉美「え——」

パニックになる泉美。店内を駆け足。周りを見渡しながら。

やはり四人はいない。

店を出る。出たところで追ってきていた店員に肩を捕まれる。

店員「きみ、ちょっと」

泉美、必死の形相で周囲を見渡す。

店員「取ったものを出しなさい。事務所まで来てもらうから」

へたりこむ泉美。

○稲島神社

散歩前。ヤマトガワヒョウガの手綱を取っている真央、その

横の璃音。二人に対峙している義文。

義文「気持ちはどう分かった。寄合でちゃんと伝えるから」

真央「ありがとうございます」

義文「わたしも二人と同じ気持ちや」

真央「おじさん」

義文「最初はこんなゲンの悪い馬が神馬なんは納得いかんかった

けどな。なんや情も湧いてきてなあ」

真央「はい」

義文「けど、期待はしなや。有名な雑誌に記事が出たんや。頭の固

い人もいるから正直難しいと思う。やるだけのことはやってみる

けどな」

真央「はい、お願いします」

璃音「お願いします」

頭を下げる真央と璃音。

駆けてくる涼子。三人から少し離れたところで止まる。青ざ

めたその顔。

義文「なんや、おまえ。どないした」

涼子「あなた、ちよつと」

涼子のもとへ歩く義文。二人、真央と璃音に背を向ける。

義文「なんやてえ!？」

訝しみながら、ヤマトガワヒョウガを曳いて歩き始める真央。

ついて歩く璃音。

○瀬戸内海

稲島へ向かうフェリー。

○フェリー・駐車エリア

まばらに車が止まっている。

○義文の車の中

運転席の義文。後部座席の涼子、泉美。

無言。

ラインの着信音が鳴る。スマホを取り出し画面を表示する泉美。Aからである。

【ラインの文面】に重なるユイの声「無期停お疲れ〜。万引きなにかわたしらがやってたわけないやんΣ(≡)。あ、わたしシヨウくんときあうことになったから。シヨウくん、万引き女とちよつとでもつきあってたかと思うと自分に腹立つって言うてたでwwwwww」

嗚咽する泉美。立て続けに鳴るラインの着信音。

○前同・路上

ヤマトガワヒヨウガを散歩させている

真央と璃音。

璃音「そっか。部屋にこもったままなのか。ラインに返信は？」

首を横に振る真央。

真央「何回もメッセージ送ってるんやけど」

璃音「既読は？」

真央「つく」

璃音「会いたいけど、会えないんだろうね、真央に」

真央「だったら」

璃音「でも会っちゃいけないって思ってるの。本当は会いたくてた

まらないの。だから最初に真央に正直に告白したの」

真央「なんで、泉美が万引きなんか——」

璃音「今でも微妙？ 泉美さんのこと」

真央「分からねん。でも、泉美に会いたい。会って話したい」

璃音「うん」

前から自転車でやってくる耀一郎と晶輔。

耀一郎「おおっ、木崎に鈴城！」

晶輔「やったぞ！ 俺らやったぞ！」

自転車を止める二人。

真央「空気読んでえや。なにをやったんよ」

耀一郎と晶輔、荷台にくくりつけていたクーラーボックスを

おろして蓋を開ける。

耀一郎「どうや、チヌじゃ！ メバルにスズキもいてるぞお！」

晶輔「こっちはマダイや！ グレにアブラメもや！ アジなんか何

匹いてるかわからんわ！ 入れ食いや入れ食い！」

大物でいっぱいのクーラーボックスを見て目を丸くする真央

と璃音。

璃音「すごい」

耀一郎「なあ木崎。麻生帰って来てるんやって？ やっぱりこれは

麻生のおかげやで」

真央「泉美の？」

耀一郎「そや。巫女が帰ってきたから海の神さんが喜んでんのや！

そやから大漁や！」

晶輔「俺、ここでマダイ釣ったのなんか初めてや！ 全部きっちり

シメてるで！シメるだけでもごっつい手間やったわ！」

耀一郎「今から二人で捌くんや。麻生に持って行ったらもう思ってたな。

なあ！」

晶輔「おう！」

喜色満面の二人。

真央「あんたらは——」

耀一郎「ん？」

真央「ほんまに、最高のアホやわ」

璃音「うん、最高のアホだ。とっとと捌いてきてよね」

耀一郎「アホアホうるさいわ。九九最後まで言えるようになったわ」

真央「はちろく?」

耀一郎「えっ——はちろく、はちろく、しじゅうごー!」

爆笑する真央と璃音。

晶輔「アホお! はちろくしじゅうにじゃ!」

笑いの止まらない二人。

○麻生家・外景

旧家の豪邸。

○前同・泉美の部屋の前・廊下

広い廊下。部屋の扉前に真央、璃音、耀一郎、晶輔と涼子。

涼子「泉美。真央ちゃんらが来てくれたんよ。みんな心配してるん

よ。顔見せて」

返事はない。

真央「泉美。おばちゃんから聞いたよ。夜中にちよつと食べてるだ
けなんやろ。そんなんあかんよ。おにぎり作ってきたんよ。なあ、
ここ開けて」

耀一郎「麻生。俺ら今日大漁や! 麻生が帰ってきたからや。タイ

飯のおにぎりや。木崎と鈴城が握ったんや。旨いぞお。出てこい
や」

璃音「泉美さん。真央に会いたいんでしょ。だからライン送ったん
だよ。真央もすごく心配してる——」

ダンっ! 部屋の中から扉を叩く音。

晶輔「アタリがあったな」

真央「え?」

耀一郎「うん。あとは釣り上げるだけ。俺らに任せとけや」

× × ×

(一時間ほどが過ぎ)

部屋のドアがゆっくりと開く。

出てくる泉美。泣きはらしたその目。

誰もいないことを確認する。

廊下の端に置かれた四個のおにぎりの乗った皿を見る。歩を進める。皿を手に取りろうとした時――。

廊下の端から猛烈な勢いで走ってくる耀一郎。もう一方の端から晶輔も。

驚く泉美。慌てて部屋に戻ろうとする。

耀一郎「晶輔、ドア！」

晶輔、すんでのところでドアを閉める。

耀一郎、泉美の肩を掴み、抱え上げ横抱きにする。激しく身をよじって逃れようとする泉美。離さない耀一郎。

廊下の端から現れる真央と璃音。

真央「いつまでやっとなの。泉美はよ降ろして」

耀一郎の頭をはたく真央。

璃音「そうよ。それやっていいのは彼氏だけ」

耀一郎「そやかて俺、麻生のこと好きやんけ。小学校のときから」

真央「なっ……どのタイミングでなにを言うてんのよ、このアホ。はよ降ろして」

また耀一郎の頭をはたく真央。泉美を降ろす耀一郎

真央「泉美」

泉美、うつむいて真央を見ない。

真央「泉美、おなかすいたなあ。あっちの部屋にもつとええもんある」

泉美を抱きしめる真央。優しく髪を撫でいく。

泉美「……あっ、あっ、ひぐっ……あぐっ」

真央「ご飯食べようなあ泉美。あんた出てくるの待っててわたしらもお腹へったわ」

泉美、泣き続ける。

耀一郎「万引きがなんや麻生。覚えてるやろ。俺ら中学んとき村田

ストアーでコマセ盗んで捕まったの」

晶輔「村田のおババ、めっちゃ足速いんや。杖振り回して追いかけてきてなあ。あんな杖なしでも歩けるやろ」

耀一郎「鼻血出るまでオトンにどつかれた」

晶輔「俺は一週間おかゆと水だけ。虐待やであんなん」

真央「あんたらな、ほんま黙ってて」

泉美「真央……真央……わたし……」

真央「うん。なんにも言わんでええんよ」

泉美を抱きしめ続ける真央。

璃音、穏やかな顔で二人を見ている。

○防波堤

並んで腰かけて海を見ている真央、泉美、璃音。

離れたところで耀一郎と晶輔が釣りをしている。

真央「『一軍』とかしようないこと言ってるからこんなことになるんや」

泉美「——うん」

真央「それに、絶対許されへんことがある」

泉美「え」

真央「あの子らに巫女の装束着せたこと。泉美、学校から帰ってあれ着る前はいつも水のシャワー浴びて、体洗ってからやった」

泉美「うん」

真央「お正月、あれ着るときはわたしもそうした。けどあの子らにそんなんさせてないよね。あとき泉美もしてなかったよね」

泉美「——うん」

真央「コスプレの衣装やないんよ。そんなん泉美がいちばん分かってることやろ」

璃音「真央」

真央「言うとかなあかんことなんよ」

泉美「ごめん。わたしほんまに間違ったことした」

真央「ほんまにそう思ってる?」

泉美「うん。思ってる」

真央「そやったら、よし」

泉美「あの、鈴城さん」

璃音「え?」

泉美「あの、わたし、あなたのこと、真央に」

璃音「ああ。うん」

泉美「——ごめんなさい」

璃音「ははっ。事実だし。別になんとも思っていない」

泉美「わたしが犯罪者なのにな——」

璃音「引きずっちゃだめ。それ言ったら耀一郎くんも晶輔くんも万

引きの犯罪者だよ」

真央「アホ罪もある」

笑う真央と璃音。

璃音「父親のことがなかったら、わたしここに来れてないんだよね。

それ思うと、なんか不思議だよ」

遠くに見えるトンカチ岩を指さす真央。

目をやる泉美と璃音。

真央「璃音に教えた。この夏に何回も二人で飛び込んだ」

璃音「早起きして、朝早くに。アホみたいに何回も何回も」

真央「『アホみたい』やなくってほんまもんのアホや。あの二人とい

っしょや」

耀一郎と晶輔を見て笑う真央と璃音。

泉美「うん。そっか」

泉美、トンカチ岩をじっと見つめて。

泉美「じゃあ、来年の夏からは三人で飛び込むやね」

真央「泉美」

泉美「分校に通うよ。ずっと欠員募集してるから転校できるんやっ

て」

真央「うん」

璃音「あー、ラブラブな二人に割って入れるかなあ」

真央「なにを言うてるのよ」

笑う三人。騒いでいる耀一郎と晶輔に目をやる。耀一郎がベラの大物を釣り上げている。

耀一郎「見ろや、ベラや！ 旨いぞお！」

璃音「知ってる！」

真央「なんでも釣るなあ、あのアホは」

璃音「いちばんの獲物は泉美さんだったけど」

泉美「ははっ」

璃音「お姫様だっこ」

泉美「うん、生まれて初めて」

真央「やめてえや。泉美と耀一郎じゃつり合いが取れん」

泉美「そっかあ。耀一郎、小学校の時からわたしのこと好きやったんかあ」

真央「ちよつと泉美」

晶輔の竿にも魚がかかる。大きくしなる竿。

真央「晶輔、バラすなよ！」

騒ぐ二人を見る三人。

○稲島神社・ハヤテサクラコの墓標前

手を合わせ、頭を垂れている颯希。

その少し後ろにいる真央、泉美、璃音。

祈りを終えた颯希、振り返って。

颯希「サクラコは、幸せな馬やなあ」

真央「え？」

颯希「こないしてお墓まで作ってもらって。こんなんしてもらえらサラブレッド、何頭いてると思う？」

ヤマトガワヒョウガの嘶きが厩から聞こえる。

颯希「今のが？」

真央「はい」

颯希「よっしゃ、アメリカ行く前に、新品の鞭と鐙の具合を試させてもらおう」

泉美に歩み寄る颯希。彼女の額にデコピンをする。

泉美「痛っ」

颯希「悪いことした子はこれや。泉美ちゃん、あんたも幸せもんやで。ちゃんと受け止めてくれるツレがいてるんやから」

泉美「はい」

颯希「っていうことを元祖デコピン女も思ってくれてるかいなあ。

いや、思っていないやろなあ、あいつは」

真央「美途さん、お元気ですか」

颯希「あれから重賞二つ勝ってますます調子に乗ってるわ。向こうで腕磨いて、帰ってきたらブツちぎったるねん」

朗らかに笑う颯希。

○椎美が浜

砂浜に立っている真央、泉美、璃音。

ヤマトガワヒョウガを駆る颯希が戻ってきて下馬する。

颯希「この馬はなにも悪くないのにな」

同馬の首筋を優しく撫でる颯希。

颯希「GI、取れてたかもわからんね、おまえ」

颯希、璃音を見て。

颯希「乗ってみる？ 久々に鞭入れられて、走る気満々になってるわこの馬」

璃音「え」

颯希「乗れるんやろ」

璃音「いや、でも乗馬の乗り方だから。あんなふうには」

颯希「まあ、乗ってみ」

璃音「——はい」

騎乗する璃音。

璃音「鐙、短い」

颯希「競馬用やからね。騎座しっかりしてるわ。よし、モンキー乗り教えてあげる」

璃音を指導し始める颯希。

× × ×

遠くを見ている真央、泉美、颯希。

見はるかす視線の先に、微かに人馬。

璃音を背にしたヤマトガワヒヨウガが駆けてくる。だんだんと三人に迫ってくる。風を巻き、三人の前を一気に駆け抜けていく。

泉美「うわっ」

真央「璃音、すごい」

颯希「センスの塊やな、あの子。さすがG I ジョッキーの娘や。なあ、ほんまにあの馬、ここ出ていかされるのん？」

真央「寄合でそう決まったって。泉美のお父さん、がんばってくれ
たみたいなんやけど」

颯希「出て行った先は」

真央「それは——」

颯希「そっか。でも、今の走りみたら島の人みんなあの馬ここにおいておきたいって思うのどちがうか」

真央「みんなが見たら？」

颯希「そう。日経新春杯勝ったような馬、簡単に廃用にしてええわ
けないやろ」

ヤマトガワヒヨウガ、ギャロップで戻ってくる。その背、紅潮している璃音の顔。

璃音「最高だよ、もう！」

璃音、叫ぶように。

○稲島神社・ヤマトガワヒヨウガの馬房

馬房の前でヤマトガワヒヨウガの削蹄をしている千堂駿太。
それを見ている真央、泉美、璃音。

× × ×
蹄鉄を打つ駿太。

× × ×
打ち上がった蹄鉄を同馬の蹄に押し当てる駿太。ジュワツと音がして煙が上がる。息を飲む三人。

駿太、三人を見てニヤツと笑う。

蹄鉄を蹄に釘で打ち始める駿太。

駿太「いい足だ。GⅡ勝つだけの足だ——（真央に）削蹄、これまでどうしてたの？」

真央「昔、馬の売り買いやってたっていうおじいさんがいて。その人がたまに。サクラコのと きも」

駿太、手を止めて。

駿太「馬喰上がりの素人仕事かよ——これから二カ月に一回は来てやるよ」

真央「本当ですか」

駿太「颯希の置き土産だ。中途半端にほったらかしたら颯希に怒られる。それに乗っかってくる嫁にも怒られる。ははっ」

泉美「あの、お金は」

駿太「いらぬ。これは人間がこいつにやったことへの詫び料だ」
作業を再開する駿太。

○稲島神社（秋祭り当日）

参道に〈稲島神社祭礼〉の幟が何本も立てられている。

○栄枝の家・仏間

栄枝に手伝ってもらい、武者装束を着ている璃音。

栄枝「ポニーテール、かわいいやん」

璃音「おでこ丸出しで恥ずかしい」

着付けを終える。凛々しい武者姿の璃音。しみじみと彼女を見て栄枝、涙ぐむ。

璃音「栄枝さん」

栄枝「ごめんね。よう似合ってる。ほんまによう似合ってるわ」

仏壇のフォトスタンドを手に取り、昭幸の写真を取り出す。

栄枝「いっしょに走ったって」

璃音に写真を差し出す栄枝。

璃音「はい」

受け取る璃音。懐にしまう。

真央の声「璃音ー。準備できたー?」

玄関から真央の声が聞こえる。

○前同・玄関

三和土に立っている真央と吟子。やってくる璃音と栄枝。

真央「ふわあ……」

吟子「かつこええやん」

はにかむ璃音。

璃音「吟子さん。シナリオありがとうございます」

吟子「よう書けてたやろ。ただの馬駆け神事復活よりずっとインパ

クトある」

璃音「はい。あの、それから」

吟子「うん。希望は分かった。本気なんやな」

璃音「はい」

吟子「確認するけど、芸能の仕事に未練はないんやな」

璃音「はい、ありません」

吟子「三十人に一人の狭き門やで。専門学校卒業した子らもたくさ

ん受けるんやで」

璃音「来年落ちても、二十歳の制限まで受け続けます」

吟子「分かった。運動能力の試験もあるよ。八月まで島駆けまわっ

て、体鍛えときや」

璃音「はい」

吟子「二次試験の最後は保護者も込みの面接や。そこまで連れてっ

いよ」

璃音「吟子さん——ありがとうございます！」

深く頭を下げ、顔を上げる璃音。

吟子「あんた、ええ顔になったわ」

璃音を見つめて頷く吟子。

○稲島・路上

自転車を飛ばしている耀一郎と晶輔。

顔に付け髭。山賊風の和装をしている。

○前同・稲島神社・鳥居の前

自転車を止める二人。参道を駆けだす。

○前同・能舞台

舞台に設えられたスピーカーから雅楽の音が流れ、それに合わせて舞っている巫女装束の泉美。

多くの参詣者がその様子を見ている。

舞を終える泉美。深く礼をする。拍手が沸き起こる。そのと

き舞台に闖入する耀一郎と晶輔。驚く参詣者たち。どよめき

が起きる。

耀一郎「おまえがこの神社の巫女か！」

泉美「は、はい」

耀一郎「噂通りの美女。決めた！俺はお前を嫁にする！」

泉美に近寄り、横抱きにする耀一郎。

泉美「きゃあっ！」

参詣者たち、これが寸劇と分かり、笑ってその様を観始めている。

耀一郎「巫女を取り返してほしくば追ってこい。返り討ちが怖くな

ければな。わはっはっはっはっはっ！」

晶輔「わあっはっはっはっはっ！」

能舞台を降りる耀一郎。そのまま駆け出す。晶輔も。

泉美「たーすーけーてー！」

泉美の声が響く。

○前同・参道

泉美を横抱きにして必死で走る耀一郎。

泉美「セリフ上手いこと言えたやん！」

耀一郎「必死で覚えた！ 麻生！」

泉美「なにい！」

耀一郎「おまえめっちゃええ匂いする！」

泉美「すけべっ！」

楽しそうな泉美。

○前同・能舞台

どよめいている参詣客たち。

そこに駆け上がってくる武者装束の璃音。

璃音「稲島神社の巫女が山賊どもにかどわかされたと聞いた。本当か！」

ヤンヤの喝采。「ほんまやでー」など声。

璃音「許しておけぬ！ 奴ばらのいどころは分かっている。権美方

浜の果てだ！ 成敗の上巫女を取り返す！ 島の者らよ、ついて

こいー！」

大拍手が沸き起こる。能舞台を降りる泉美。

○前同・境内

美しい装飾を施されたヤマトガワヒョウガ。同馬の手綱を取っている真央。

人馬へ歩み寄る璃音。

二人見つめあって、頷く。

同馬に跨る璃音。その歩を進め始める。

○前同・島の路

ヤマトガワヒョウガを進める璃音。しずしず進む人馬の後ろを賑やかに歩いて歩く島の人々。

○前同・権美方浜沿いの道

泉美を荷台に乗せ、力いっぱい自転車こいでいる耀一郎。その後を追いかけるように晶輔も全力で。

耀一郎「麻生！」

泉美「なにー」

耀一郎「大阪の学校の場所、教えろや！ おまえだましたやつら、俺ぶちのめしに行っちゃる！」

泉美「——いいよ、そんなの」

耀一郎「遠慮すんな！ 刑務所に入ったってかまへんや！」

泉美、涙を拭う。

泉美「耀一郎！」

耀一郎「なんや！」

泉美「好きー！」

耀一郎「——おっ、お、おお、俺も好きー！」

耀一郎、いっそうペダルを踏む足に力をこめる。

晶輔「ええなあ、耀一郎。まあ俺、木崎のこと好きやから別にええけど」

権美方浜沿いの道を疾走していく二台の自転車。

○前同・権美方浜

大勢の島民が集まっている。

ヤマトガワヒョウガを駆った璃音がゆっくり戻ってくる。璃

音の前に跨っている泉美。

下馬し、泉美を降ろす璃音。拍手が起きる。再び同馬に跨る璃音。

璃音「山賊どもを討ち果たし、巫女を取り戻したぞ！ 稲島に弥栄あれ！ えいえいおう！」

時の声を上げる璃音。呼応する島の人たち。

璃音「島の者らよ、神馬ヤマトガワヒヨウガの勇姿、とくと見よ！」

ヤマトガワヒヨウガを走らせる璃音。

息の合った疾走。

波打ち際を走る人馬。波を飛び越えるように同馬をジャンプ

させる璃音。

どよめきと歓声。拍手。

走り、跳ぶ人馬。歓声と拍手が続く。

観ている何人もがスマホをかざし、その様を収めている。

群衆から少し離れた場所でその様を見ている真央。

耀一郎（声）「木崎ーっ」

路の上から耀一郎の声。

自転車に跨った耀一郎と晶輔が、大きく両手を振っている。

真央「耀一郎！ 晶輔！」

二人に大きく両手を振り返す真央。その晴れやかな顔。

○前同・トンカチ岩（翌年・八月）

スクール水着を着てトンカチ岩の平場の上に座っている真央、

泉美、璃音。

泉美「いよいよ来週だね」

璃音「うん」

泉美「自信は？」

璃音「——あるよ。腕立ても腹筋も背筋も毎日やってきたんだもん」

真央「妖怪腹筋割れ割れ女」

璃音「うるさい。それにさ、GⅡ勝った馬に毎日乗ってきた受験生

なんて、他にいないよ」

泉美「やんね」

真央「学科はなにがあるんやった？」

璃音「国語と社会」

真央「よかったやん数学なくて。二次元方式とか出されたらアウトやん璃音」

璃音「もう、ほんとうるさいなあ。騎手なんかね、九九言えたらそれ

れでいいのよ——ねえ、泉美」

泉美「ん？」

璃音「キスとかした？」

首を横に振る泉美。

泉美「手も握ってない」

璃音「ええっ、マジで？」

泉美「『巫女には結婚まで手を付けたらあかんのや』言うて」

璃音「ほええ」

真央「どうしようもないアホやな」

泉美「やんねえ」

笑う三人。

璃音「泉美は卒業したらどうするの」

泉美「——大阪の大学行こうと思ってる」

璃音「そっか。怖くない？」

泉美「負けたまま終わりたくない」

璃音「うん。真央はやっぱり公務員試験受けるの？」

真央「うん。鹿野さんと同じ地域振興課に配属されたいんやけど。

まあそれも受かったら話しやけど」

璃音「受かるよ絶対。それにきつとそうなるよ」

三人、しばらく穏やかな海を見やっ

璃音「じゃあさ泉美。耀一郎と学生結婚とか？」

泉美「え、なんでよ」

璃音「だって『結婚するまでは』って言ってるんでしょ、耀一郎」

泉美「うん」

璃音「耀一郎がまんできないでしょうよ」

泉美「できないかなあ」

璃音「できないよ普通」

泉美「やんね。あいつ、大阪の会社に就職するって言ってるんよ。

そうだったら、きつとわたしの方ががまんできひんのやないかな
って思う」

泉美を見る真央と璃音。

泉美「ははっ」

泉美、璃音をまっすぐ見て。

泉美「受かるよ璃音。競馬学校。絶対」

璃音「——うん」

真央「はい、ランウェイ歩いて来てからの」

璃音「え？」

真央「はい、ほら立って立って」

璃音「うん」

立ち上がる璃音。ポーズを次々と決める。拍手する真央と泉
美。

真央「きゃーっ、璃音ちゃん！」

泉美「かわいいーっ！」

璃音「あはははっ！ きゃーっ！」

海に飛び込む璃音。真央、泉美も続く。

三人の嬌声が響く。

○刑務所・面会室

アクリル板を境にして向かい合っている遥平と騎手の猿渡広
道。

広道「そうか、娘さん会いに来てくれたのか」

遥平「ああ」

広道「言ったのか、出たら大道さんの牧場で働くって」

遥平「ああ。ほっとしてたよ」

広道「うん、そうか」

遥平「サワ、ありがとう」

深く頭を下げる遥平。

広道「寿々芽のときもそうだっただろ。海野さん、下手こいた人間は大道さんに任せることにしてるみたいだな。大道さん笑ってたそうだよ『うちは不良騎手の更生施設じゃない』って」

笑う広道。涙を拭う遥平。

遥平「あと、娘な」

広道「うん」

遥平「マイルチャンピオンシップ、勝ったときのこと、しつこく訊いてきたよ」

広道「ほう」

遥平「『どんな気持ちで乗ったんだ』とか『どんな乗り方したんだ』とか『勝った時どんな気持ちだったか』とか。あんなの訊かれたの初めてだった」

広道「そりゃあ嬉しいよなあ」

遥平「とにかくあいつに迷惑かけない生き方をしなきゃいかんと思ってる。もちろん猿渡にも。海野さんにも。世話になる大道さんにも」

広道「まあ、あんまりしゃっちょこぼるな。張り詰めすぎると切れちまうぞ。酒はほどほどにな」

頷く遥平。

広道「しかし元モデルで女優の卵だろ。広告塔に使われるぞお、JRAに」

遥平「バクチはもうしない。パチンコも競艇もやめる。けど、璃音が無事に卒業して、馬乗りになれたら、あいつの乗る馬の単勝だけは買うよ」

広道「ああ、そりゃいいな。俺も湖乃葉の単勝、ときどき買ってるんだ」

遥平「いくつになっただけ姪っ子さん」

広道「二十二だ。この前車の免許車取ってな、あいつの運転でここまで来たんだ」

遥平「そうか。スーパーキンググレイディーカップ勝ったんだよな、今年」

広道「ああ。身内の欲目抜きで見ても力つけてきてるよ。いつか二人、帝王賞や東京ダービーでいつしよに乗る日が来たりしてな」

遥平「——いつか、そんな日が来たら」

広道「その日は、一緒に大井に行こう」

遥平「うん——サワ、本当にありがとう」

また頭を深く下げる遥平。涙をこぼす。

広道「風邪ひくなよ」

遥平「うん、うん……」

すすり泣く遥平。

○稲島・椎美が浜

砂浜に引かれているスタートライン。

耀一郎、晶輔、ヤマトガワヒョウガに騎乗した璃音。二百メ

ートルほど先に立っている真央と泉美。

泉美「♪『チャラチャ、チャツチャツチャツチャツラ、チャラチ

ャチャーラ、チャツチャツ——』」

関西GIのファンファーレを歌う泉美。

泉美「——チャーツ、チャラチャツチャツチャツ、チャチャチャチ

ャーン！」

真央、手を振り上げ、振り下ろす。走り出す耀一郎と晶輔。

璃音「いち、に、さん、し、ご、ろく、なな、はち、きゅう、じゅ

う——ヒョウガ、ゴウッ」

走り出す人馬。颯爽と。

あつさり二人を抜き去る。ゴールラインを駆け抜ける。力な

く砂浜に倒れこむ二人。

真央「こら——っ、一回くらい最後まで走れ——！」

泉美「耀一郎——！ お祭りの時みたいに走らんかいな！」

砂浜にくずおれたままの耀一郎と晶輔。

耀一郎「そやから勝たれへんって……」

晶輔「祭りのときはな、麻生抱えてたから速かってん、こいつは…

…」

ゴールラインを駆け抜けていった璃音とヤマトガワヒョウガがキャンターで戻ってきて、真央と泉美の側をぐるぐる回る。

同馬を止める璃音。

太陽を振り仰ぐ。

右の拳を突き上げて。

璃音「真央と泉美に弥栄あれ！ えいえい、おう！」

呼応する真央と泉美。

真央・泉美「えいえい、おう！」

真央「鈴城璃音に弥栄あれ！」

真央・泉美「えいえい、おう！」

呼応する璃音。

璃音「えいえい、おう！」

三人の鬨の声。

璃音・真央・泉美「えいえい、おう！」

璃音「ホウっ、ヒョウガ！」

波打ち際を駆け始める人馬。

打ち寄せる波をもとせせず、疾走し跳躍するヤマトガワヒ

ョウガ。

鞍上の璃音、ただ生き生きと。

璃音を見つめる真央と泉美。穏やかで、まぶし気な二人の顔。

(了)